
インフィニットサイボーグクロちゃん

ペイオネット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニットサイボーグクロちゃん

【Nコード】

N5508T

【作者名】

ペイオネット

【あらすじ】

じいさんとばあさんに飼われている猫がある科学者にIS機能をつけられた。そして IS学園の織斑一夏とクロの不思議な物語が始まる。

運命の日（前書き）

はじめて書きました

小説描くのは 自分ペイオネットはウルトラマンとか仮面ライダー
そのほかなのはとかISにもはまっています。そしてこの第1にサ
イボーグクロちゃんこれは小学生の時最初に読んだ漫画です そし
てインフィニットストラトスのコラボレーション実現して嬉しいと
思っています ぜひ見てください

運命の日

この町に住んでいる一匹の猫はしあわせそうに寝ていた

寝ている猫はクロこの町にやっできてじいさん ばあさんに拾われ
餌や寝床まで用意してくれるクロにとってしあわせだった・・・
・・・だがクロにとって運命という
道が開こうとしていた

そんなクロにめずつと片思いの女の子がいた

そして今日はなんと彼女にプロポーズをする気らしいのだ

つまりクロにとって今日は運命の日なのだ

しかし

ズコーン

「にゃ？」

ヒューー

ブスブスブスブス

クロはプロポーズに行く途中 矢にあたりそして何本の矢に突き刺され クロは息絶えた

「くっくっ手に入れたぞ この猫にIS機能をつければ今のISよりも優れていることを思い知らせてやるぞくっくっくっくっ」

男は死んだクロを抱えてどこかへ消えた

この日はクロにとって別の意味で運命の日だったのである

運命の日（後書き）

次に織斑一夏との話になります
IS学園の話は次の次にやる予定
です

反応（前書き）

一夏が初のインフィニットストラトス装着者の話です セシリアの
バトルどっついう風にするか悩んでいます

反応

その後あるテレビ番組では

「今日は話題の織斑一夏君についてです」

「織斑一夏君が女性にしか反応しない兵器IS通称インフィニットストラトスを使いこなしたことです」

「一夏……!!」

織斑一夏の幼なじみ篠ノ之箒は驚いた様子で言った

「彼はこれからどうなるんでしょうね」

「政府としてはあそこに行かせるでしょうねIS学園に」

「えっ……一夏も……
箒は啞然とした様子で言った

「ではこの先織斑君はどうすべきか・プツン

「はあ 他に考えることないのかよ……………」

この少年 織斑一夏彼こそ唯一ISの使える男子である

「さて どうするべきかねえ……………」

一夏はやる気なさそうに言った

「ん 千冬姉！ 帰ってたのか」

「ここは私の家だ そりゃ帰ってくる」

織斑千冬 彼女は一夏の姉であり ISの装着者 今は引退している

「これ 制服？ どのの？」

「IS学園のに決まってるだろ」

一夏は不思議そうに言い

千冬は当然というふうなセリフで言った

「あそこはどこの国も手出しできない 入学すれば少なくとも三年間は安全だ」

「はあー、なんでこうなっちゃったのかなあ」

「夏はやる気なさそうに言った

「その気を落とすなIS学園も普通の高校と大差ない ところで過ごそうと日々を充実させるのはお前自身だ」
千冬は当然といったように言った

「求めよさらば与えられん そろいうことだ」

「千冬姉 詳しいな」

「まあな」

「夏は興味なさそうにIS学園のパンフレットを見た

「IS学園かあー」

この学園で一夏とクロの不思議な物語が始まるうとしていた

反応（後書き）

今回はクロちゃんが入力ユニットストラトス発動を設置したサイボーグになりますお楽しみ

突入（前書き）

今日はクロちゃんがIS搭載のサイボーグになりますどうぞ

突入

とある研究所では

「ふっふっふっふっふに完成した諸君この先一体誰が世界を手にするか 人間か違う世界を手にするのは私ドクター剛とお前たちアニマルサイボーグたちだ」

「わっはっはっは」

ドクター剛彼は動物をサイボーグにし世界征服を企む悪の科学者である

ブン

ポカン

「ぐえ」

突然飛んできた物体が剛の頭に当たった

「むっ おおー目覚めたか私の最高作品「K」」

ク
この猫は彼女に会うために出かけ突然矢に刺さって息絶えた猫である

「てめー何勝手に人の体改造してんだよ!!!」

クロは剛に怒鳴った

「おおー素晴らしいさすが我が最高傑作」

剛はテンション上げてはしゃいだ

「人の話を」

ググッ

「いやーなぜお前を捕まえたか それはなお前は生身でもあの抜群性 反射神経 運動能力普通猫とは違うところがあってな私はそれに目をつけてお前をサイボーグにしたのだ まあ 礼はいらないぞーわっはっはっはっは」

剛は高笑いをしながら説明した

「聞けって」

バキッ

ブン

ゴン

クロは研究所の柱をいとも簡単にとって剛に叩きつけた

「いやーかげんにしろそれにお前はただのサイボーグではない　IS
機能を搭載したサイボーグだ」

「あいえす？なんだそりゃ？」

クロはきょとんと頭を傾いた

「ふふふ　教えてやろうISとは人間が身につけるいわゆるパワー
ドスーツというものだ　そして　それは女性にしか反応しない代物
だ」

剛は不気味に笑いながら説明した

「ふーんなんでそんな力をオイラに身につけたんだ？」

「ふふふ　それはお前が優秀だからだそれにお前体の中には制御装
置があるのだ　だからお前は逆らったり逃亡するようなマネ「これ
か？」

剛が説明しているそばからクロの耳から制御装置を取り出した

「 × ? ! 」

剛はわけのわからない言葉を言っている

「さっき耳ほじってたら出てきたぞ!」

パソコン

「いた〜い」

制御装置を剛にぶつけた

「何が世界征服だバカ頼みもしねえでこんな体に改造しやがって」

クロは剛の勝手なことで怒った

「まっその性能とやらを試してみようか

」

クロは腹からガトリングを取り出した
そして研究所を打ちまくった

バリバリバリバリ

ドカン ドカン ドカン

ドーーーーン

「ふん」

そしてクロは街にいたいまの姿だと目立つからである

「くそ なんとか身につける物を探さなきゃ行けねえし……ん
っ」

クロが目につけたのはゲームセンターの入口の隣にあるクレーンゲ
ームだった

早速クロはクレーンゲームの中に入り身につける物を探した

「へっへコイツは使えるぜ」

クロが目につけたぬいぐるみは前のクロにそっくりのぬいぐるみだ
った

そしてクロはぬいぐるみの綿を出して皮だけになりそして身につけた

「おおーいいねぴったりフィット」

どうやら気に入ったらしい

ジー

「げっ」

クレインゲームの外で見ている小学生が
クロをジーと見ていた

そして チャリン

クロはぬいぐるみのふりをしたが

「！」

やっぱりばれてキャッチされると思いきや クロが隣にあるぬいぐるみで危機を切り抜けようとしたが

手が挟まってぬいぐるみを掴んだままキャッチされた

「やった 2つまとめてゲットだ」

小学生は喜びながら言った

ゴト

「あれ」

小学生は驚いた一つは落ちてきたがクロはいなかった

「おかしいな？」

小学生が手で中をぶらぶらしたが何もなかったのでどこかに行った

ちなみにクロは

「ふぬぬぬぬ」

落ちる前に踏ん張って壁についていた

クロは悩んでいたじいさんたちの所にどうやって帰ればいいか？

「んっ あの車に乗っかりやじいさんたちの所に帰れるかもしれね

ー」

そう思いクロは車にしがみついて車は移動した

しかしクロは知らなかったこの車はIS学園まで行くことを・・・

・・・

突入（後書き）

次はクロちゃんが一夏と筭に出会いますそしてセシリアも登場します
すお楽しみ

えっ猫？ ロボット？（前書き）

次の企画はトリコとあるアニメのクロスオーバーしようと考えてます
今日はセシリアと一夏のバトルにクロちゃんが乱入してきます
見てください。

えっ猫？ ロボット？

クロは車の下でしがみついていた

「うーん この車って北海道までの飛行機に行かねーのか？」

クロは不安そうに考えたクロは北海道生まれでここは北海道じゃないのかと考えていた

その頃ISS学園では

今日は高校の入学式新しい学校新しい教室

だが俺を緊張させているのはそんなことではない

では 何か？

決まっている

クラスメイトが……全員女子なのだ

これは想像以上にきつい

「織斑一夏くん？」

「はっ はいっ」

「ひゃっ!？」一夏は驚いて立ち 山田先生も驚いた

山田真耶 彼女はIS学園の副担任であり一年間 一夏たちの先生である

そして担任は……

「新学期早々 早々しいぞ 織斑」

「へっ」

一夏は驚いたもう一人の担任は一夏の姉であり現役時代 公式戦
無敗の元日本代表第一世代IS操縦者
織斑 千冬であった

「聞いているのか 織斑？」

千冬は一夏をギロリと睨んだ

「なっ なんて」

一夏は不思議そうに言った

「諸君 私が織斑千冬だ 君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ 出来ない物には出来るまで指導してやる 逆らってもいいが私の言うことは聞け いいな」
一夏は啞然としたままだった

「……き……」

「キヤー 千冬様 本物の千冬様よ！」

「美しすぎます。」

「愛しています！」

「恐れ多くて お顔を見られません!」

「ずっとファンでした!」

「お姉様に憧れて この学園に来たんです!」

「私 お姉様のためなら死ねます!」

というような千冬に憧れた女子はわんさかである

「・・・毎年 よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ 感心させられるそれとも私のクラスにだけ集中させてるのか?」

千冬は呆れた様子で言った

「まあいい 織斑 続ける」

「えっ ああ」

一夏は自己紹介しようとするが

「えー えっと織斑一夏です よろしくお願いします・・・
あれ? 篝?」

タジタジしていたが幼なじみの篝がいたからだ

ヒュ

パーン

「痛っ」

「お前は自己紹介もまともにできんのか」

千冬は出席簿で一夏を叩いた

「いや 千冬姉・・・俺は・・・」

「学校では織斑先生と呼べ」

パーン

また 叩いた「さあ！！SHRは終わりだ 諸君らにはこれからI
Sの基礎知識を半月で覚えてもらう！！その後実習だが 基本動
作は半月で体に染み込ませろ いいか いいなら返事をしろ よく
なくても返事をしろ 私の言葉には返事をしろ 以上だ」
一夏は思った教師なんてしてたのかよ・・・と

「席につけ馬鹿者」

心配した俺が馬鹿でした

そして休み時間

クラスメートの女子 たちが一夏の話題で持ちきりだった

一夏では誰か助けってくれってと思った

「一夏 話がある」

一夏の目の前に現れたのは幼なじみの箒であった

「箒」

一夏は箒について行って行って教室を出た

「ふー」

「・・・」

一夏は周りの女子たちがいなくなって安心した様子だった

「久しぶりだな 箒」

「え？」

「すぐ筭ってわかったぞ 髪型 昔と同じだしな」

「よく 覚えているものだな」

「そりゃ 覚えてるって」

筭は照れて 一夏は当たり前のように言った

「引っ越して以来それっきりだったけど 親父さんは元気か？あと・
・束さんも」

「・・・あの人は・・・私とは関係ない・・・」

一夏は筭の姉 束のことを言うと 筭はなぜか恐い顔で言った

「？ 束さんと何かあったのか？」

キーン コーン カーン コーン

「時間だ戻るぞ」

「あつ おい！！！！」

チャイムが鳴って筭はクルリと教室に戻った

次の時間では

「それでは この時間は実践で使用する各種装備の特性について説明を・・・ああ そのまえに 再来週のクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

このIS学園にはクラス対抗戦というものがありその代表者を決めなければならないIS学園の行事である

「はい 織斑くんがいいと思います！」

とクラスメートの女子が言った

「えっ 俺!？」

「ナイスアイデア」

「私もいいと思います」

他の女子たちも一夏に賛成したようだ

「ちょっと待った 俺そんなの」

一夏は焦った様子で言った

「自薦他薦は問わない 他に候補者はいないか？ 無投票当選になるぞ？ ちなみに他薦されたものに拒否権などない選ばれた以上は覚悟をしろ」

「いやでもっ」

「納得できませんわ！！」一夏は辞退しようとしたが誰かが怒鳴った

「そのような選出は認められません！ 大体 男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！ このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

セシリア・オルコット イギリスからやってきたエリートである

「いいですか！？ クラス代表は実力トップがなるべきそれは私ですわ！ 何せ私 入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「？」

一夏は興味なさそうに聞いた

「イギリス代表候補生でもあるわたくし以上に相応しい人間はいないはずですよ」

「入試ってIS動かして戦うやつ？」

「それ以外に入試などありませんわ」セシリアは威張りながら説明した

「俺も倒したぞ 教官」

「なっ！！！！ あなた！あなたも教官を倒したって言うの！？」

「落ち着けよ な？」

「これが落ち着いていられますか！！ わざわざこんな島国にまで来たうえに極東の猿と比べられるなんて・・・このような屈辱耐えられませんわ！！」

「イギリスだって島国だし 大したお国自慢じゃないだろ」

この言葉がセシリアの堪忍袋の緒がキレるトリガーになった

「なっ あっあっあなたねえ！？ わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

セシリアは大切な祖国を侮辱したことに切れた

バンッ

「決闘ですわ」「いいぜ 四の五の言うより わかりやすい」

どうやら一夏もやる気がしい

「おちつけ 馬鹿ども」

パン パン

「いた」

「った」

千冬は一夏とセシリアに出席簿で叩いた

「とにかく話はまとまったな 勝負は一週間後の月曜 放課後 第三アリーナで行う それぞれ用意をしておくように」

『はい』

「えーっと 1025 1025・・・」

一夏は寮に行くのである 本当は自宅から通学するつもりだったが事情が事情なので無理矢理ねじ込んだらしい ちなみに荷物は千冬が手配したそうらしい着替えと携帯の充電器があれば十分だそうだ

「おっここか」

ガチャ

「しかし疲れたこれからどうしたもんか」

ガチャ

「ああ 同室になったものか 一年よろしく」

現れたのは

「こんな格好ですまないな 私は篠ノ之ほ……」
一年の幼なじみ篠ノ之箒であつた

「い いちか……」 箒は顔を赤くしながら言った

「お……おつ」

さらに箒は ガシ

「みつ見るな——」

箒はそばにある竹刀を持って一夏を叩いた

一方その頃クロは

プシュー

ガチャ バタン

(どうやら 着いたようだな)

クロは車の下から出た

そしてクロが見たのは

「んっ ここって外国か？」クロはIS学園の風景を見た

「でも飛行機に乗ったような 船に乗った形跡はないよな」

クロは不思議そうに考えた

「さてよ ここはまだ日本か？」

そう思いクロはIS学園の一番てっぺんまで登った

そしてクロは

「うん 日本のようで日本じゃない」
クロはそう確信した

「やっべーわ 間違えてじーさんたちのところまで行かないでここに来ちまった」

クロが乗ったのはI学園までに移動した車だった

つるっ 「うわっ!？」クロはIS学園の建物の部分の金属から滑って 落ちた

ヒューー

その時間前では

一夏と筈はクラス代表戦に向けて特訓をしていた

そしてその代表戦当日(クロが来た日)

「織斑くーん」「

山田先生が一夏を探していた

「山田先生 どうしたんですか そんなに慌てて」

真耶は走り疲れて息を切らした

「あのですねっ………来ました 織斑君専用のIS」

「へっ」

「ピットに搬入してあります 「え あの」 時間ありません急いで」

真耶は一夏を押してピットに急いだ

「アリーナを使用出来る時間は限られている ぶっつけ本番ものにして」

「これが織斑君専用のIS「白式」です」

クロが乗った車は一夏専用の機体「白式」を積んだ車だった

一夏は白式を装着した

「よし 篤 行ってくる」

「……あぁ……勝つてこい」

「夏はセシリアのいる方まで行った」

「あら 逃げずに来ましたのね」

セシリアが操るI第三世代機ブルーティアーズ中距離射撃型に優れた機体である一方クロは

ヒューー

今も落ちているところだった

「よく 落ちるなーオイラは」

そう思うクロだった

一方一夏はセシリアの攻撃でやられると思ったが白式の剣 雪片
で一夏はセシリアの攻撃をつまぐ交わしたのだが

「俺の勝……………んっ?」

ヒューー

ペタ

突然 クロが一夏のフェイスに着陸した

「……………」

『……………』

これを見ていたアリーナで見ている生徒たちとセシリアと箒と山田
は驚いた

「んっ」

「おい 離れろ!!」

一夏は顔にくつついてクロを取った

「なんだ お前？ いきなりこの所から飛び降りてくるなよ」

一夏はクロに怒鳴りつけたが

「うるせーお前こそいきなり怒鳴りつけるんじゃないよ」

クロは一夏に怒鳴り返した

それを聞いた全員は

「・・・・・・・・・・」

『・・・・・・・・・・』

『・・・・・・・・・・』

観客席の生徒たちと千冬以外 篤 山田 は啞然とした

「・・・・・・・・・・き」

『きゃーあああ!!--!』
観客席の生徒たちは驚いた

「ねー あのネコしゃべったよ」

「あれって 手品?」

そう感想言ってる生徒たち

ジャキ

「?」

「そのネコさん 決闘の邪魔なので とつと出てってくれませ
んこと?」

「あ なんだよ お前?」

セシリアはクロに銃口を向けて言った

「なんだよ 勝手にえらそうに言いやがってこのシンシン女」

(ピクッ)

クロの発言に少し反応したセシリア

「おい やめろよ なんか あいつ怒ってるようだぞ」

「うるせー大体あいつムカつくんだよ オイラはあいつの召使いじゃねーんだよ」

(ピクッピクッ)

「オイラはあいつをぶっ倒す」

「お前 すごい自信だなあ」

クロは親指を顔に向けて言い 一夏は驚いた様子で言った

だが

「ちよっとっ」

『ん』
バンッ

セシリアは堪忍袋の緒が切れたように打ち込んだ

「あなたのような性格の悪いネコはどうやらお仕置きが必要みたい
ですわね？」セシリアはクロに銃口を向けた

(んっ そっいえば)

クロは剛の言った言葉を思い出した

(お前の機能はただのサイボーグではない IS搭載のサイボーグ
だ) 『!?!?』

(なんかあいえすを起動させる装置ってこれか)

クロは首に巻いてある首輪を見ながら言った
ピカー

そして突然クロの体の周りが光出した

「まぶしい」

「なんですのこの光は」

光が弱まると

「!?!?!?」

『!?!?!?!?!』

一夏たちは驚いたクロが彼らと同じようにISを身に付けた姿だった

「なんだこれ？これがあいえすって奴なのか？」

クロの日常生活は完全にこわれた

この先はまた次回

えっ猫？ ロボット？（後書き）

次はトリコとあるアニメのクロスオーバーしようと考えてます

決着（前書き）

クロちゃんの武器はアニメしか登場しない武器も出ます。すごいです

決着

とある深海800メートルの基地

ピッ

「あのーすいませんもうお金足りなくなったのであのーお金を・・・」

モニターに映ったのはクロをサイボーグにした科学者ドクター剛が映った

「甘いことは許しませんあなたの作ったサイボーグでしょ自分の責任を他人のせいにするのはどうかと思いますが」

叱っているのはメガネをかけて髪をポニーテールでとめ秘書の姿をした女性である

「そ それは・・・」

剛はダンマリとした

「もしアナタがあのかを捕らえることが出来なければアナタは即この組織から脱退クビです それを忘れなく」
女性は呆れた様子で言った

「あつ ちよつとまプツン

モニターを切った

「？」

女性は後ろを向いた

「ふー帰ってきて早々に 叱ってるの」

歩いてきたのは柴犬だった

「シバ アナタいつお戻りに」

「今帰ったとこ……そういやーさー日本に新しいIS搭載のサイボーグアニマルが出来たって本当？」

シバはそのことに興味を持っていた

「ええ いまISが発動したらしいわ 見て」

パッ

「へーコイツが……」

「そうアナタたちIS搭載サイボーグアニマルの最後の戦士K「ク
ロ」よ」

モニターでアリーナでISを発動したクロが映し出された

一方アリーナでは

「なんだ あれは」

「ネコさんが・・・・・・・・・・ISを発動したんでしょうか？」

箒と真耶は突然現れたネコがISを発動したことに驚いた

（なんだ 動物がISを発動したなど そんなことが・・・・・・・・）
千冬はなぜクロがISを発動できたことを思っていた

一方アリーナの試合会場では

「ネコが……」

「ISを……発動したんですの？」

一夏 セシリアは驚くように言った

「うわーなんだよこれー本当にオイラ あいえずって奴を発動したのかー？」
発動したクロも驚いた

「ふん たとえ発動したとしても 同じこと」

セシリアはクロに向けてライフルで撃った

「げっ くそっなんかないか?!」

クロは腹の中から出したのは高速飛行シューズ ウィングシューズ
である

バシュー

クロはウィングシューズをはき空中を飛んだ

「よっしゃ これならいけるぜ」

「くっ!!--!」

セシリアは周りあるピットでクロを攻撃した

ギョ
ン

ギョ
ン

「うわっ あぶね なんだよあれ ス ライクフ ダムかよ あ
れ」

「さあ 踊りなさい私のワルツを」

（あれ厄介だなオイラの位置と角度を確実に狙ってやがる フ
ネルの制御と他の武装との併用はできないってか……！ってこ
とは」

クロは考えてる内にはっと思いついた

「好きだらけですわ」

セシリアはピットで打ち出したが

クロはガトリングを出し

「くらえ」

ピットを撃ち落とした

「なんですって」

（わざとスキを作ってあれをおびき寄せれば 一気に懐に 届け

！！)

クロはセシリアに向けて銃を放とうとしたが

「おあいにく様 ブルーティアーズは6機ありますのよ」

「ミサイル!?!」

「夏はびっくりして言った

ドウ ドウ

セシリアはミサイルを放ったが

「んなもん 関係ねえええー!!!!」

クロは腹の中から大剣を出した

「うおらああー」

ザシユン ザシユン

ミサイルは見事に真っ二つに切り裂いた

「なっ」

「そんな」

「うそでしょ」

一夏 セシリアアリーナの女子たちは驚いた

「くっ」

セシリアはライフルで撃ち落とそうとしたが

ふっ

クロはすぐかわしセシリアの所まで来た

「おりゃー！ー！」

パリン

クロの剣の攻撃でセシリアのシールドエネルギーは減った

「きゃっ」

セシリアはクロの攻撃にやられ尻餅をついた

〔勝者 乱入の黒猫〕

「えっ オイラ勝ったのか?!」

クロは啞然した様子で言った

「すげーミサイルを一刀両断するなんて」
「夏はもう声も出なかった」

「なんて戦い方だ」

「あのネコさん私達のISよりも強いんじゃない」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

篤と真耶は今見た戦いを見て驚き 千冬は険しい顔でクロを見た

その一方では

「なるほど あれがKの力か・・・・・・・・」

シバは今映し出された戦いを感じて

「よし 早速 他の支部の奴ら呼んどいて」

「はい 直ちに」

シバは女性に別支部の仲間を呼ばせた

（なるほど あのサイボーグアニマル これから楽しみだ」
シバは不適に笑いながら言った

この次は待て次回

決着（後書き）

次は千冬たちがクロちゃん
の秘密を探ります

調査の結果（前書き）

千冬たちがクロの体を調べたことを話します

調査の結果

「おあいにく様 ブルーティアーズは6機ありますのよ!!」

「んなもん関係ねえー」

「はっ」

クロは目を覚ましたここはIS学園の医療室であった

クロは戦いの後発動モードから元に戻って意識を失ってしまったのだ

「………そっぴゃあの時 ガチャ

「気がついたようだな」

医療室から現れたのは 千冬と真耶と一夏だった

「おまえら」

クロは驚いた様子だった

「お前が倒れている間お前の体を見させてもらったぞ」

千冬が証拠にクロのぬいぐるみを持っていた

「げっ」

クロはいつのまにかサイボーグ丸出したということに気がついた

「お前の体の中には特殊な部品がいくつもあつたがな」「特殊な部品？」

「ああ お前が発動したIS・・・私たちのISよりも強い力今の私たちの科学じゃはかりしれない一体どこでその力を」

千冬はクロに質問したが

「知らねーよ オイラはなんの頼みもなし作られたんだよ」

「じゃあお前を作ったのは誰だ？」

「オイラをこんな体にしやがったのは剛っていうアホ科学者だよ」

そしてクロは千冬たちに剛が無断でクロをサイボーグにしたことを話した

「・・・IS搭載のサイボーグか」

「でもどうしてISを人間じゃなくて動物につけたんでしょう？」

「世界征服ってなんか漫画の話かと思っていたけど本当にそんなこ

とするなんてな　なあ　千冬姉「学校では織斑先生と呼べ馬鹿者！」
パン

「痛っ」

千冬は出席簿で一夏を叩いた

「そんで　オイラをこれからどうするつもりだここで大人しく実験材料になれってか」

クロは千冬たちを警戒しながら言った

「・・・お前を実験材料にしようとする馬鹿な考えはしない今は大人しくそこにいろということだ」

そう言い千冬たちは医務室から出て行った

「なんだよ　そりゃ・・・っておい出ていくんなら着ぐるみ返してから行けー」

この大声はIS学園のほんの一部響き渡ったという

その頃

ブロロ

「じいさんたちついたぜ」

トラックから出てきたのはクロの飼い主のじいさん ばあさんである

「いやーやっぱり引越つーのは悪くなかったな？」

「そうじゃな じいさん 新しい家に住めるのはいいもんだねー」

彼らを買った家とは古ぼけた家であったそしてクロちゃんはいさ
ん ばあさんに出会えるだろうか待て次回

調査の結果（後書き）

クロちゃん ミーくんマタタビを出す時思いついた時ロミオとジュリエットそしてコタローとダンクを出そうと思っ
てます後鈴木もそして赤椿の話が終わったら自分が書くオリジナルの話を書こうと思っ
てます。

代表決定 カメラでカシヤ（前書き）

やりました 苦労しました どうぞ

代表決定 カメラでカシヤ

サアアアア

セシリアは戦いの後シャワーを浴びていた

セシリアは一夏との戦いの後にクロが乱入しクロの強さに負けたことを思った

(今日の試合織斑一夏の戦いの時に最後の一撃を当てようとしたときあの黒猫……誰にも媚びることのないまっすぐな強い眼差し……織斑一夏……あんな男は初めて見ましたわ そう……まるであの人とは違う)

セシリアの過去 母は強い人だった女尊男卑の風潮に染まる前からずっと……女の身でありながらいくつもの会社を経営して成功を収めた人だったそれに比べて父は名家に婿入りしたせいかもしれないかも母の機嫌を窺っていた いつもオドオドしている父を見て「将来は情けない男とは結婚しない」なんて私は小さい頃から思っていた 母はそんな父が鬱陶しそうで親子三人で過ごす時間はなくなっていた そんな二人だったのに 三年前のことだ 二人は一緒に死んだ

越境鉄道の横転事故 死傷者は百人を超える大規模な事故だった

……あの二人はいつも別々にいたのに どうしてその日だけ一緒にいたんだろう……誰にも私にもわからなかった 莫大な遺産と私一人置き去りにして二人はいなくなってしまった

そして私の周りには金の亡者が群がった

両親が残した財産を誰にも渡す気はない 二人を残したものを守るため私にはありとあらゆることを勉強した IS適性テストでA+を出した私に政府は国籍保持のためいくつもの好条件を提示した それは遺産を守るため役立つもので 私はイギリス代表候補生として選ばれた そして・・・第三世代機装備 ブルーティアーズのマスターとして稼働データと戦闘経験値をえるため ここへと やつて来た

(あつという間だった・・・あつという間に時間が過ぎて私はIS学園に来た・・・そして出会ってしまった・・・理想の強い瞳をした男と猫)

「織斑一夏・・・」

(知りたい 彼らのことを もっと・・・)

セシリアはシャワー室でそう思った

そしてジリリン ジリリン

ガチャ

「へい そば信 何フジ井さん五目そば大至急!？」

「そーじゃうちのバーさんがキトクなんじゃ 死ぬ前にアンタとこの五目そば食いてえっていつとるんじゃ」

「よっしゃあ！ そういうことなら任しとけ！」そば信のオヤジは大至急そば入りのおかもちを持ってスクーターで行った

「ちよっ おやっさんいまなんか動物がもぐりこんだような」

店員が言った言葉をきかないで行った

キキイイ

ドン バコン

ガラガラ

「おまちい！ バーさんハア まだ生きてるかハア」

「ああ 生きとるよ」

「そいつはよかった」

そば信の店長はほっとため息をついた

「代金はいらねえ バーさんにうちのそば食って成仏しなっ
ていつか あばよー！」

そう言い残し店長は店に戻った

「どーした？ ジーさん」

「おめーにウラムミがあるらしい」

ジーさんはおかもちを開けた瞬間

『クロ!?!』

出てきたのは ジーさんとバーさんの飼い猫クロだった IS学園
のマップモニターを見て覚えてここに帰ってきたのだった

そして3日が過ぎた

クロは老人夫婦と一緒にコタツに入ってゆっくりしていた
クロは思った「なんていい人たちにかわれているんだろ」と・・・
・だが

コンコンコンコン

「?」

突然しまっている窓に何かが音をしていた クロは開けた瞬間その時

パアーン

『クロちゃん クラス代表決定おめでとう!!』

開けた瞬間IS学園の生徒たちが待っていた 一夏も箒もセシリア
もいた

「・・・・・・・・」

クロは唾然するしかなかった

「・・・・・・・・てかなんでここがオイラン家ってわかったんだよ」

クロは質問した

「実はね 織斑先生がクロちゃんが着ている着ぐるみに発信機をつけてたんだって」

女子生徒は答えた

「あの女ー」

クロは拳を握り締めながら行った

「ところで代表ってなんだ？」

クロはキョトンと頭を傾げた

「IS学園には年に一度のクラス代表戦があるんだよ それに優勝したら学食デザート食べ放題なんだよー だからクロちゃんと織斑くん 頑張ってねー」

クロは思った好き勝手いう女子生徒たちだなーとこちとらまだあの力制御できない状態だし

「あれ オイラと？あいつも選ばれたのか？」

クロは一夏を見ながら言った

「あっ それはね」

「私が辞退したからですわ」

セシリアが言った

「それで 私も大人気なく怒ったことを反省しまして一夏さんとクロさまにクラス代表を譲ることにしましたわ」

「なんちゅーありがた迷惑・・・んっ今クロさまって」「それで・・・ですわね私のように優秀かつエレガント華麗にしてパーフェクトな人間がIS操縦を教えて差し上げれば一夏さんとクロさまもみるみるバキッ

「生憎一夏の教官は足りている 私が直接頼まれたからな」

突然箒が家の柱の一本壊して言った

「篠ノ之さん Aの私に何かご用かしら？」

「ランクは関係ない！私が頼まれたと言っているんだ い・・・一夏にどうしても懇願するから」

（してねー）

一夏はそう思った

「全くきてそうそう喧嘩か 馬鹿ども」

黒い車が来て出てきたのは 千冬と真耶だった

そして

「あんねー こりゃまたこんなに女の学生さんがいるべなー」

「みんな クロのお友達かい？」

『はい』

生徒たちは全員そう発言した

（勝手に決めんな！）

クロは心の中でつぶやいた

そして千冬と真耶はじいさん バーさんと対談した

「えっと おじいさんとおばあさんが飼っている猫ちゃんをうちの学園に入学させたいんですけど・・・よろしいでしょうか？」

真耶はクロをIS学園に行かせる許可をもらおうとしたが

『・・・・・・・・・・』二人は黙っていた

（なんか言えよ いかせまんとか 駄目ですか）

「この猫は特別な物を持っている だからお宅の黒猫をうちの学園

に行かせれば 知力も上がります ご老人方決断は？」

千冬はIS学園の説明をしたそして

「……別にええよな」

「ん まあ ええーじゃろ」

何もなさそうな言葉で許可を許した

(ちゃんと脳で考えてしゃべれよお前ら……」

クロはじいさんバーさんを睨んだ

『やったー これで一緒に学校であえるね』

「じゃあ 一緒に記念撮影しようよ」

「じゃあ セシリアは右手クロちゃん持ってもう片方は織斑くんと
手をつないで」

「えっ」

セシリアはクロを持ち 一夏の手を握った

(なんか ドキドキしますわー)

そう思うセシリアであった

「じゃあ 3 2 1」

カシャ

こうしてクロちゃんとES学園生徒 千冬と真耶そしてじいさんバ
ーさん一緒に映っていた

クロは思ったなんて都合のいい人たちに飼われてるんだろうと

そしてここは待て次回

代表決定 カメラでカシヤ（後書き）

次はあの中国代表が来ますお楽しみ

もう一人の幼なじみ（前書き）

インフィニットストラトスを見るようになったのは仮面ライダーオーズとインフィニットストラトスのコラボを見て 面白いと坎じました さいよいよ中国代表候補生の鈴があらわれます

もう一人の幼なじみ

あゝ 疲れた

IS学園に戻り一夏はベッドに寝転んだ

「今日は楽しかっただろう 良かったな」
箒は不機嫌に言った

「どこがだよ・・・疲れただけで楽しいもんか お前が逆の立場だったら楽しいのかよ」

「ああ...そうだな 楽しいかもしれないな」

一夏は箒に質問したが箒は不機嫌に言った

(何怒ってるのか わからんが・・・箒って昔から一回言い出すと引っ込みがつかなくなかって自爆するタイプなんだよな 適当に話を切り上げよう)

「あつ そう・・・じゃあ俺寝るわ」

「なっ なに？ まだ10時半ではないか」

「疲れたんだよ・・・」

バフッ

「ぶへっ!?!」

箒は一夏に枕を投げた

「何しやがる!?!」

一夏は箒に怒鳴ったが

「それはこちらのセリフだ 今から寝間着に着替えるんだから むこうをむいている!?!」

箒に怒鳴り返された

「……あのなあ 箒…… そういつのはお互いが部屋にいない時に済ませ」

ギロリ

一夏は興味なさそうに言ったが箒に睨まれた

「わかったわかった 後ろ向いてますよ」

一夏は箒の着替えを見ないために後ろを向いた

時間がたって

「い……いいぞ」

一夏は後ろを見た

「あれ……帯が新しいやつだな」

「よ……よく見ているな」

「いや……色も模様も違うから気づくだろ　　箒を毎日見てるからな」

「そ……そうか！　私を毎日見てる……か！　そうか　そうか」

「うん？」

箒は少しだけ赤くなって言ったが一夏はキョトンと箒を見た

「よし　では眠るとしよう！」

「お……おう」

（あれ？　機嫌が直った？　怒ったり笑ったり　よくわからんな
箒は……）　そう思う一夏であった

パチン　部屋の明かりを消して　二人は眠った

「……一夏……」

「んっ?」

「さっきはその……すまなかつたな……」

(どのことたる)

「いいよ別に……」

「そうか……それならいい……」

箒はそう言い残し眠った

その日……一夏は夢を見た 昔の夢を

一夏ともう一人の幼なじみの夢を

翌朝

「ふうん ここがIS学園か ここにアイツがいるのね……まさかアイツがISの操縦者になるなんてね……」

新たな戦いが幕を開けようとした

「ねえねえ聞いた？この話」

「二組に転校生がくるんだって！ さっき職員室で聞いたって人がいたらしいよ」

「転校生？」

クラスの女子たちが転校生の話を持ちきりだった 一夏は転校生と聞いたときキョトンとした

「なんでも 中国代表候補生らしいですわ」

「セシリア」

「私の存在をを危ぶんでの転入かしら」

「このクラスに転入してくるわけではないのだろうか？ 騒ぐほどのことではあるまい」

箒は不機嫌そうに言った

「代表候補生か・・・どんなやつなんだろうな」

一夏は代表候補生のことを気になっていた

『気になる』

「のか？」

「んですの？」

第 三 セシリアは一緒に言った

「今のお前に女子を気にする余裕はないぞ！ 来月にはクラス対抗戦があるんだからな！」

「そうですね 一夏さん！ クロさまも対抗戦に向けてより実践的な訓練をさせましょう 相手は専用機持ちの私がいつでも務めさせて頂きますわ！」

「お……おっ」

（好き勝手言うなあこちとら基本操縦でまだつまづいてるっていうのに）

そう思う一夏であった

「まあ うちには専用機持ち二人と一匹がいるし 楽勝だよ！ね！
織斑くん」

「えっ……ああ」

その時

「その情報……古いよ」

「えっ」

現れたのは篝よりもやや身長が低めで髪をツインテールに伸ばした女の子だった

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの　そう簡単には勝てないから」

ザワザワ

女子たちは現れた女の子にザワザワしたが一夏は

「お前は・・・鈴・・・お前・・・鈴か？」

一夏は女の子の名を言った

それを聞いた篝とセシリアはじろりと一夏を睨んだ

「そうよ　中国代表候補生　鳳　鈴音　久しぶりね　一夏」

現れた中国代表候補生　鈴　そして一夏二人の関係は一体そしてこの先はまた次回

もう一人の幼なじみ（後書き）

あ-----書けた

再会（前書き）

9月に始まる仮面ライダーフォーゼ フォーゼの小説を書くことと考
えています。そしてお待ちせしました。今回もクロちゃん出番な
しです。どうぞ

再会

転校してきた中国代表候補生 鳳 鈴音

一夏たちと一緒に食堂で食事していた

「鈴 いつこつちに帰ってきたんだ？ いつ代表候補生になったんだ？」

一夏は鈴に質問したが

「質問ばっかしないでよ アンタこそ男なのにISなのにISとか使っちゃってニュース見てびっくりしたわ」

鈴は質問を興味ない代わりに一夏のこと
に注目していた

「一夏さん！ そろそろどういつ関係か説明していただきたいですわ！！」

「そつだぞ！ まさか 付き合ってるなんてことはないだろうな！？」

セシリア 筈は鈴という子は一夏と一体どういつ関係なのか質問した

「ベ・・・別に付き合ってる訳じゃ」

鈴は少し赤くなりながら言った

「そうだと、何でそんな話になるんだ？ ただの幼なじみだよ」

一夏はめんどくさそうに答えた

「幼なじみ……？」

「あ……えっとだな、箒が小4の終わりに引越しただろ？
鈴は小5の頭に越してきて、中2の終わりに国に帰ってたんだ」

ジロリ

箒は鈴を睨んだ

「ほら鈴……前に話したろ？ 俺の通ってた剣術道場の娘」

「ああ……そういえば聞いたわね……ふーん……そうなんだ……」

一夏は鈴に箒を紹介したが興味なさそうに答えた

「初めまして、これからよろしくね！」

「篠ノ之、箒だ、こちらこそよろしくな」

バチバチバチバチ

（今二人の後ろで火花が散ったような……幻覚か？ 俺、疲れてるのかな……）」

一夏は彼女たち二人の見えない何かを見たような

「コホン 私の存在を忘れてもらっては困りますわ・・・中国代表候補生 鳳 鈴音さん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・誰？」

「なっ・・・！ イギリス代表候補生のこの私をまさかご存知ないの！？」

「うん あたし 他の国とか興味ないし」

「なっ なっ 何ですって・・・！！」

セシリアは自分の存在を知らせたが鈴は別の国なんか興味なくセシリアはそのことを驚いた

「い・・・言うておきますけど！ 私・・・あなたのような方には負けませんわ！」

セシリアは強く鈴に宣戦布告をしたが

「あっそ でも戦ったらあたしが勝つよ 悪いけど 強いもん」

鈴は自信げに言い返した

(相変わらずコイツ(鈴)は自信家だなあ・・・素で自分の強さを口に出すから 必要以上に敵を作るんだよな)

そう思う一夏だった

「そんなことより ねえ 一夏！」

「ん？」

「あんた クラス代表なんだって ISの操縦 あたしが見てあげてもいいけど？・・・も・・・勿論 一夏さえ 良ければだけどさ・・・」

「り・・・鈴 実は俺は・・・」

Bannon

「一夏に教えるのは私の役目だ！ 頼まれたのは 私だからな！！」

「あなたは二組でしょう！？ 敵の施しは受けませんわ！！」

テーブルを叩きつけ怒鳴る 篝とセシリア

「あたしは一夏に言ってるの 関係ない人 たちは引っ込んでよ」

「1組の副代表ですから 1組の人間が教えるのは当然のことですわ！」

「へっ副代表って 一夏！？ じゃあ1組の代表候補生って誰なの」

鈴は一夏に1組の代表候補生は誰なのか質問した

「えっと そいつは」

「それはクロさまですわ！」

一夏は答えようとしたがセシリアが答えた

「クロ？ そいつってどんな奴なの？」

鈴はキョトンと質問した

「そいつは猫なんだよ」

一夏が答えた

「……………ぷっ あははははは
ドンドンドンドン」

鈴は大笑いし腹を押さえてテーブルを叩いた

「ちよっそれ どういう冗談 ウケる」

鈴は笑いまくった

「それよりさ鈴 親父さん 元気にしてるか？」

「はっ……………あ……………うん……………元気だと思う……………」

一夏は父親のことを話したが なぜか笑いを止めてダンマリした

「え？」

「そっ それよりさ！ 今日の放課後 時間ある？ 久しぶりだし
どこか行こうよ！」

ガシッ

「あいにくだが 一夏はISの特訓をするのだ 放課後は埋まって

いる」

「そうですね！ 対抗戦に向けて特訓に向けて特訓が必要不可欠ですからね！」

箒 セシリアは当然というようなセリフで言った

「・・・ふーん・・・」

鈴は箒とセシリアを睨んだが

「まあいいわ」

鈴は納得したように見えたが

「じゃあそれが終わったら行くから 空けといてよ！ ー夏ー！」

「お・・・おう！」

そう言い残し鈴は食堂から出た

なにやら乙女の戦国時代が始まるようなと言いかクロちゃん出番なかつたな次出てくるか 待て！！次回

再会（後書き）

次はクロちゃんが一夏たちと一緒にESの特訓と授業を受けます

授業と特訓 前半(前書き)

疲れました やっぱり二回小説かくのはしんどいです。

授業と特訓 前半

ISアリーナの授業 そこにはクロもいた

「よし では三人とも 武装を展開しろ」

千冬は一夏 クロ セシリアのISの展開させるよう指示した

「う〜ん」

クロは険しそうな顔で考えた

「どうしましたの クロさま？」

セシリアはクロが悩んでるのを質問した

「なんか・・・ISってちょっと迫力あるって感じがするなー」

クロは思ったこんなアニメに出てきそうなロボットの体の部分が自分の体につけてることを

「何をやっている！！オルコット クロ 織斑！！時間を無駄にするな！！」

クロが考えてる時に千冬が怒鳴った

「悪い 千冬」

ピキッ

「わっばか　ここじゃ織斑先生って呼べよ!？」

クロが言ったセリフに千冬を呼び捨てで言ったことで千冬はピクリとした時　一夏は止めようとしたが

「・・・まあいい次はISの基本的な飛行操縦をしてもらおう」

(えっ・・・いいの!?)

クロは千冬を呼び捨てで言ってもいいのかとそう思う一夏であった

「織斑　クロ　オルコット　その場から急上昇しろ」

『はい!』

ギユウン

「早!?!」

一夏は驚いたまだISを制御できないクロがセシリアと同じように急上昇できることに驚いた

「何をのろのろしている　スペック上の出力では白式の方が上だぞ」

「は　はい　千冬姉」

一夏は答えただが

「学校では織斑先生と何度もいつてるだろ 馬鹿者」

ギロリ

一夏は千冬に睨まれた

(なんでクロの時は呼び捨てで俺の時は駄目なんだよー)

そう思う一夏であった

ギユウン

「ええと・・・急上昇は確か『前方に角錐を展開するイメージ』」

一夏はやっと二人の所までたどり着いた

「山田先生 クロのISのことで何かわかったことは・・・」

「はい・・・クロさんのISを調べた結果わかったことはクロさんのISには近接格闘 中距離射撃その二つの戦闘が可能だと分かりました。」

「・・・そうか」

「ただ分からないのは・・・」

「なんだ？」

「クロさんのISの名前は「ジェフティ」そしてゼロシステムと」

「ジェフティ……ゼロシステム……」

ちょうどその頃

「博士 Kを発見クロのことかしました。」

「剛くん コイツがクロなの？」

「そうだよミーくんこいつがサイボーグアニマル最後の戦士Kだよ」

「へー……そういえばどうやって監視してるの？」

ミーくんは剛に質問した

「ああ 今監視カメラロボット「キョトンボ」が今写っている場所が見れるんだ」

ちなみに現場

パタパタ

じーっ

基地

「すごいよ 剛くん 今写ってる場所とKがいるよ」

ミーくんははしゃぎながら言った

「よーし おい もっとクロの所まで近づけさせるー！」

「かしこまりました」

剛はトルーパーロボに指示して操ってるキョトンボをクロの所まで近づけさせた

ブーーン ピタッ

「んっ?」

バーーン

「がああああ!?!」

どうやらクロとキョトンボの目と鼻の所まで近づきすぎたようだった

「くそ 出てきて驚かすんじゃないねー」

バキッ

ドカーン

「どうしましたの クロさま?」

「いやなんでもない」

そういうクロだった

基地では

ドカーーン

どうやらキョトンボを破壊したら基地で爆発するしくみらしい

「……失敗したね」

「……うん……」

そう言う剛とミーくんだった

その頃

「一夏さん イメージは所詮イメージですわ 自分にあつた方法を模索する方法を模索する方が建設的ですわよ」

「そう言われてもな……大体空を飛ぶ感覚自体がまだあやふやなんだよ どうやってういてるんだ これ？」

一夏はセシリアになぜ空を飛ぶのを説明した

「あら……説明しても構いませんが長いですわよ？ 反重力力翼と流動波干渉のお話になりますか……」

「うっ……いや……いい説明はいい……」

「そう・・・残念ですわ」

どうやら一夏はISの難しい所まで分らないらしい

「すごいなオイラたちこんなに離れてるのに」

クロが見ているのは今映し出されている下の女子生徒を見ていた

「あら 当たり前ですわ！ 元々ISは宇宙空間での稼働を想定したもの 何万キロも離れた星の光で自分の位置を確認するにはこれぐらいの距離は軽く見えなくてはなりませんのよ ちなみにこの状態でもかなり機能制限がかかっているんでしてよ」

セシリアの説明はわかりやすい 知識面も大いに豊富で非常に勉強になる これが第の場合だと・・・どんとかずかーん・・・だもんなあ・・・

「織斑 クロ オルコット 次は急降下と完全停止をやって見せる 目標は地表から十センチだ」

『はい！！』

そして時間が立って

「馬鹿者・・・グラウンドに穴を開けてどうする 誰が地上に激突しろといった？」

どつやら一夏は急降下しすぎてグラウンドに激突したらしい

「すみません」

「自分で開けた穴だ 自分で埋めておくように」

そう言い千冬は去った

「情けないぞ 一夏 私が散々教えてやっただろう」

「教えたってあの擬音のことか（箒も冗談言うようになったんだな・
・・・」

そう思う一夏だったが

「貴様・・・また失礼なことを考えているな？」

用意周到に背中から木刀が出た

（なんで俺の考えてることってばれるんだ・・・）

何故か考えてることをわかる箒であった

「大体だな 一夏 お前という奴は昔から「一夏」

休み時間に現れた鳳 鈴音 一体どうなるこの先は待て後半

授業と特訓 前半（後書き）

自分はやる気出せばなせばなるって感じでした。

授業と特訓 後半(前書き)

書いたーよっしやーじぶー!..!

授業と特訓 後半

休み時間に、鈴がやってきた。

「一夏・・・あんたって、グラウンドにこんな大穴あけるなんて、どっついう操縦してんのよ？」

「す・・・すまん」

鈴は仕方ないというようにため息をし、一夏は謝るしかなかった。

「んっ その小さい猫は？」

「こいつが俺たちのクラス代表のクロだ」

鈴は、クロを見て初めはキョトンとしたが、一夏が紹介した。

「ふうん こんなのが・・・」

「こんなのってなんだよ」

鈴は不思議そうにクロを見て、クロは鈴の言ったセリフにカチンときた。

短い足　いつでも爪が出せる手　そして顔は、ギロリと睨みそうな目と尖った耳、そして髪の毛二本

「ぶっ」

『？』

「あはははは」

鈴は突然、笑い始めた。

「一夏、本当に・・・もう・・・ほんと・・・こんな・・・ブサ猫が代表な訳ないでしょう。」

ぶちっ

鈴は、クロを見て結果、大笑いし、クロはとうとう堪忍袋の緒が切れ、今でも、ガトリングをぶっ放そうとしていた。

だが

キンコーン カンコーン

「あつ 次の授業が始まるわね じゃ
」

鈴は次の授業に向けて教室に戻った

そして次の授業は、国語・・・だが

トントン

クルクル

グイグイ

《なんなん》 (だ) (ですの) (だよ) 《あの女》

授業では、筆はシャーペンで机をつつきながら、セシリアは、自分

の髪をクルクル巻きつけたり、クロは一夏の頭の髪をグイグイ引っ張っていた。

箒サイド（幼なじみだと・・・！？　一夏の幼なじみは私だけで十分だ！）

セシリアサイド（篠ノ之さんが、最大のライバルだと思ってましたのに・・・代表候補生の私の方が、一夏さんとクロさまのお役に立ってるって）

クロサイド（あのおそ女、初対面で大笑いしやがって、今度会ったら、あいつの顔に蜂の巣にしてやる）

箒サイド（いや・・・待て、冷静に考えたところで、大した問題ではない・・・）

セシリアサイド（なのに幼なじみの代表候補生！？　そんなのズルですわ！　イカサマですわ！！）

クロサイド（いっそ自分の作った武器で、アイツの部屋を襲撃するのも悪くねーな）

箒サイド（何故なら私は、一夏と同室　これは誰にも負けないアド

バンテージ・・・！！）

ニヤニヤ

「そう・・・部屋に戻れば二人きり・・・！」

セシリアサイド「ESの特訓だけでは、足りませんわ・・・いつそ、デートに誘ってみる、クロさまには豪華なペット商品とか・・・」

クロサイド「みてるよ 日本のおスネコを怒らせると、どうなるか、思い知らせてやるぜ！ ヒヒヒヒ」

ブチブチ

箒は一夏と同室なので、鈴の邪魔ないと思い、セシリアは鈴が一夏の幼なじみと知り、特訓では足りないと思い、デートとペット商品で解決しようと思い、クロは鈴をどんな方法で、痛めつけようか、考えていた。

クロが考えてる中、一夏の髪の毛が抜かれた

「いてて、やめる！ やめる！」

一夏はクロに髪の毛を抜かれて、痛がっていた

「あっ
」

さくらに

バン　　バン　　バン

「だっ！！」

「いっ！！」

「もげ！！」　　「いちっ！！」

千冬の出席簿が箒とセシリアとクロツいでに「夏に、叩きつけられた。

「授業中だ　馬鹿者ども」

こうして一夏の頭がクロによって十円ハゲが出来たことは、それはまた別の話

「ふっ」

クロはIS学園のメンテナンスルームにいた。

「お疲れ様です クロさん」

「おう サンキュー だいぶ、体が楽になったわ やっぱり、このメンテナンスはすげーな」

「ありがとうございます。」

クロは授業と放課後の特訓で、だいぶ疲れて、千冬の誘いでここでメンテナンスをしていた。

「どうでしたか？ 今日の特訓、大変でしたか？」

「んーまあ、2対2であいつら一斉に襲いかかってくるから、苦勞

するんだよなー」

「ははは」

クロはセシリアと箒の容赦のない攻撃とかで二人は避けたり防いだりするのが、精一杯であった。そのことをきいて、真耶は苦笑いをした

だがこのあとある勘違いによって大きな戦いが訪れるのだった。
さて次回！！

授業と特訓 後半（後書き）

もつすぐー夏と鈴のバトルを書こうと思います。そしてクロちゃん
対ミークんの話を書きます。

喧嘩から闘いへ(前書き)

書いたーコラー

喧嘩から闘いへ

今日は、一夏対鈴の対抗戦試合当日……だがこれは思わぬ勘違いから、この闘いが行われた。

ある日、鈴は一夏と箒のいる部屋に来て箒に部屋を代われと要求したが、箒は断った。そして一夏はあの日、鈴が引越す前、一夏とある約束をしたのだった。鈴はモジモジしながら約束を聞いたが、一夏はある勘違いの所為で鈴は部屋から出て行った。そして鈴と一夏は夫婦喧嘩のような激しい口喧嘩を始めた。そしてとうとう鈴はキレて、一夏に宣戦布告され、その結果、この試合で叩き潰すという設定になってしまったのだ。

「ふーん、そんなの約束の忘れた一夏が悪いんじゃないか？」

クロは鼻をほじながら、言った。

「なんでだよ！？大体、あの約束のどこに間違いがあったんだ」

一夏は鈴と約束したことを深く考えた。

「まっとにかく、頑張れよ」

クロはそう言って、どこかに言った。

一夏はモニター画面で見た結果、観客席の女性たちは、ズラリとい
るのだった。

「うわぁ・・・満員御礼だな」

一夏はモニター画面の女性たちを見て驚いた。

「それだけ注目されているのですわ。ちなみに、会場に入りきらな
かった人達は、校舎内のモニターで観戦するんだとか」

ISアリーナ、そして校舎内でも観戦が見られるなんて、おいおい
と感じる一夏であった。

「しっかりしろ！！胸を張って、堂々と行け！！」

「そうですわ 特訓の成果を披露してくださいませ。」

箒、セシリアは一夏に特訓の成果を鈴に見せると言うような表情で言った。

そして最後の言葉は

「勝て!!!」

「頑張ってください!!!」

箒とセシリアは勝つというエールを一夏に言い放った。

「箒……セシリア……」

一夏は、二人の言葉を受け止め、いよいよ鈴とのバトルが始まる。

【一組 織斑一夏 二組 鳳 鈴音】

「逃げないで来たのね 今謝れば、少しは痛めつけるレベルを下げてあげるわ」

鈴は一夏が謝れば、攻撃を痛めつけないレベルで倒そうと警告したが

「手加減なんていらねえよ 真剣勝負だ・・・全力で来い！」

「どつあつても気は変わらないって事ね、なら微塵も容赦しない・・・この甲籠ツェンロンで叩きのめしてあげるわ」

一夏は警告を断り、鈴はもう容赦なくやるらしい。

【それでは両者・・・試合開始】

ガキイイイーン

二人の武器、雪片と双天牙月がぶつかり合った。

一方、クロはISアリーナの一番上で見ていた。

「全く、一夏は・・・あの勘違いの所為でとんだハプニングを出しやがったか・・・いや・・・まあもしかしたら・・・あの女を痛めつけられるチャンス」

ニターと笑うクロであった。

アリーナでは、

ドウ

一夏は鈴の衝撃砲に当たった

だが、一夏はこのくらいではやられなかった。

「よく耐えたわね

『龍砲』は砲身も砲弾も見えないのに」

（厄介だな・・・空間の歪み・・・大気の流れの変化をハイパーセンサーが捉えたから、衝撃を減らせたけど・・・撃たれたから動いたようなもんだ。どこかで先手を打たなくちゃな・・・いつ勝負に出るか・・・その見極めが物を言う・・・セシリアにはISの基本動作を・・・箒には刀の間合いと特性を、徹底的に叩き込んでもらった・・・それでも足りない経験の差は・・・気合いで上回ってやる!!）

「鈴!!本気で行くからな!!!!」

「当たり前でしょ!! 各の違いを見せてあげるわ!!」

一夏と鈴はいよいよ激突し終止符を打つ

だが

バシユューーン

突然、上からビームが降った

(!?)

シュウウー

現したのは全身装甲のISと……その片に乗っている一匹の柴犬だった。

トンッ

柴犬は二本足で着地した。

「こんにちは 薄汚い人間」

「!?!」

一夏たちは驚いた。柴犬は二本足で立って、言葉を喋っていた。

彼はある組織の大幹部 柴犬のシバであった。一体、どうなるまで
次回

ゼロシステム（前書き）

クロちゃんとISをミックスしたら、オリジナルの敵が出てきたり、必殺技を出すとうような事が出来上がりました。完全にキャラ崩壊したな。例え崩壊しても最後までやり切ろうと頑張りたいです。

ゼロシステム

突然 現れた謎の全身装甲のISと二本足の柴犬

「ここか……奴がいるのは……」

柴犬はアリーナをちらちら見ながら言った

「ちょっと!! あんたなんなのよ!? いきなり犬が二本足で突っ立つて、えらそうにしゃべりまくって!!」

鈴は突然、全身装甲のISから犬が二本足で立って、えらそうにしゃべりまくってたのに驚いていた。

「お前ら、一体何者だ!」

一夏は全身装甲のISと柴犬に質問した。

「……俺たちは只、奴と闘いに来ただけさ」

『奴？』

一夏と鈴は柴犬の言ったことに意味がわからなかった。

「出て来いよ？IS搭載サイボーグアニマル『K』」

柴犬はアリーナが一番上まで声を発した。そして、現れたのは……
・クロだった。

クロはアリーナの下まで降りた。

「お前……一体何者だ？」

クロは柴犬に質問した。

「俺は、IS搭載サイボーグ第2号柴犬のシバだ」

「シバ……お前もあのアホ科学者に作られたのか？」

アホ科学者とは剛のことである。

「いや、俺は別の科学者に作られた あの給料目当てのアホと違ってな」

シバは一緒にするなと言うのような言いぐさで言った。

「まっそういうしみたれた話はおいといて……俺と闘え」

「おい待てよ！？別にオイラは喧嘩売った覚えはねーぞ？」

「俺は只、お前の強さを確かめたい。只それだけだ。」

「何？これ一体どういう状況なの？！」

鈴は黒猫と柴犬が何を話してるのかわからなかった。

「じゃあ、いくぜ」

シバは首についでる首輪を発動した。

『！……！』

一夏と鈴は驚いた。柴犬がISを発動させたのだ。

「なっ何あれ？ 動物がISを使うなんて」

「あいつ……クロと同じISを発動することができるのか！？」

鈴はもう啞然とし、一夏は不思議そうに見た。

「俺のIS「アヌビス」は今いるISよりも強いぜ！！」

「お前もISが発動できるのか？ だったら、容赦しねー！！！」

クロもIS「ジェフティ」を発動した。

「えー……！！！？あの黒猫もISを！！？」

鈴はもう絶叫した。

「さあ、やるうか？K」

「あーこつちから・・・行くぜ！！！」

クロは腹から、大剣を出し、切りかかったが

ガキーン

「おいおい すこし待てよ!？」

シバの武器 ブラッドランスでクロの大剣の斬撃を受け止めた。

「こんな ステージじゃあ、少しシラケるだろ？ 俺がいい場所に案内するぜ」

シバは腹から謎の小さいスティックを上へと投げた。

シューーン

『!?!?』

一夏たちは驚いた。今、一夏たちがいた場所は謎のスティックの力で出現したのは……古代ギリシャの建造物が建たれていた。

「これは……てめー!! オイラ達を日本から離れてここで戦うつもりなのか!？」

クロは啞然し、シバに激怒した。

「おいおい、落ち着けよ。ここは日本だよ今、俺が使ったのは、俺たちIS搭載サイボーグアニマルのバトルを楽しめるためのバーチャルシミュレーションスティックだ!」

「バ……バーチャン?」

シバは今、使ったアイテムを紹介し、クロはうまく覚えられなかった。

「てゆーか、お前にもあるだろ。同じアイテムが!?!?」

「えっ嘘!!?」

シバが言ったことにクロは腹の所を探した。

「もっと、肝臓の辺りだ!! 少し右!」

探した結果、

ゴソゴソ……………あつた。

「へ〜これが〜」

クロは腹から見つけたバーチャルシミュレーションスティックを見た。

「それは、1000の記憶を埋め込まれた地球のあらゆる地形、風景、建物をリアルに再現できるんだ……………俺たちはこういう風に戦って来たんだ」

「ふーん……………こういう風にか……………」

クロは周りを見て、納得した。

「よし……それじゃ行くぞ!」

ガキイイイーン

クロ対シバの闘いが始まった。

一方 一夏と鈴は

「あっちはあっちで盛り上がってるな」

一夏は、クロ対シバの闘いを見ていた。

ザザッ

通信が入った。

「織斑くん！ 鳳さん！」

「山田先生！」

摩耶が通信に入った。

「今すぐ、アリーナから脱出してください！ すぐに先生達が制圧に行きます！！！」

「……いや……先生達が来るまで、俺たちが食い止めます」

「織斑くん！？」

摩耶は一夏たちに逃げると警告したが、一夏たちは先生達が来るまで食い止めるつもりらしい。

ドゥッ

全身装甲のISは二人にビームを放ったが、避けた。

「向こうはやる気だな……」

「みたいね」

一夏と鈴は相手がやる気だと確信したらしい

「じゃあ 行くか」

二人は戦闘態勢に入った。

「織斑くん！ 鳳さん！聞いてます！？ もしもし！ もしもし！
！」

「落ち着け」

ピシッ

「ひゃうっ！？」

摩耶は一夏たちに警告し続けたが、千冬が摩耶の額にデコピンを炸裂した。

「本人がやると言ってるのだから、やらせてみてもいいだろう」

「な……何をのんきなことを言ってるんですか!! 早く救助に行かないと!」

「これを見る」

「え……………」

摩耶はデータを見た結果

「遮断シールドがレベル4に設定……ステージに通じる扉も全てロックされている……これでは二人を救助に行けない」

「まさか……あのISとあの柴犬さんが……」

「だろうな……………」

ガキーンッ

一方クロはシバに圧倒しつつあった。

「おいおい まだ本気じゃねーんだぞ？せつかく同じ、ゼロシステムを持つ鬨いに、つまらない所をみせてどつするんだよ」

「ぜ ぜろしすてむ？」

クロはキョトンと頭を傾げた。

「見せてやる 俺たちIS搭載サイボーグアニマルの持つ……最強のカゼロシステムを」

「!?!」

クロは驚いた。シバの全身が光り出した。

さらさら

シューッ

「!?!?」

シバはゼロシステム状態で人間には見えない光速で移動した。

「驚いたか？ 俺たちの父、あるいは神と呼ばれた人からこの力を授かった……そして……これが俺たちの選ばれた力だ!!」

シバの槍が赤と黒が混ざり合い、そして

「ダークバスター!!」

ドカーーーーン

混ざり合った槍は地面に振り下ろし、大きな衝撃波がクロに炸裂した。

「うわーーーーー!!!!」

「ふん……これが人間にはない力……必殺技だ!!」

ゼロシステム発動を見せたシバそしてクロちゃんたちはこの危機を
どう切り抜けることは待て後半

ゼロシステム（後書き）

鈴の闘いが終わったら、ミーくんの話とハイウェイの話とそしてあの召使いロボと鬼ごっこ編、そして遺跡編、そして最後に天才少年の話を書いたら、IS編へ戻ろうと思ってます。

次に始まるミーくんの話にミーくんのISの名前を募集しています。どうぞよろしくお願いします。

クロの潜在能力(前書き)

ふう やつとIS編ここで休憩です。次はクロちゃんのギャグ編です。

クロの潜在能力

ゼロシステム状態のシバの必殺技を食らったクロ

「ふん、意外とあっけなかったな」

シバは呆れた様子で言った

「く……強ええ」

クロはゼロシステムの強さに驚いた。

「クロ……お前を殺すにはもつたいない 俺の部下にならないか？ どんな願いでも、あるいは人間共を殺して、俺たちの理想郷を作るとい話は持つて来いだ、どうだクロ？」

「人間を殺して理想郷を作るだ……なんでだよ？」

「……俺たちはな、まだ生身だった頃、人間が自分のストレスの為に動物を殴り 蹴り、あるいは捨てられては、人間が俺たちを……まるで腐ったぬいぐるみのように見てやがったんだよ……」

・俺はその一人だ」

シバの過去

まだ生身のシバが柴犬、人間のペットとして飼われていた時

現れたのは中2ぐらいの学生だった。

「・・・なんでだよ？　なんで俺がいじめられるんだよ?!」

バキッ

「ギャン」

学生の拳がシバの頬を殴った。

「いつも　いつも　先輩達にはコケにされるし、クラスでは俺の椅子の下にはドロドロの腐った菓子パンを乗せて、知らないまま座つたら、クラスの奴らは爆笑で俺は・・・大恥をかかされたんぞ!!」

バキ　ボコ　バキ

学生は泣きながら、シバを殴り続けた。

夜中の深夜

「くそ……俺は何もしてないのに……なんで俺は」

シバは泣きながら、わめいていた。

その時

「大丈夫だ　君をここから連れ出してあげよう」

現れたのは、謎の白いスーツを着た二本足の狼だった。

「あ……あなたは……」

「俺はIS搭載サイボーグアニマル第一号、フェンリルだ」

フェンリルは自己紹介して、シバを見た。

「IS?・・・確か人間の雌にしか反応しないとされるの・・・」

シバは家の庭にいる時、家の中のテレビの情報を少しだけ聞いて覚えてたのだ。

「ふん！」

ザシユン

フェンリルはシバの首に繋がってた鎖をISで腕だけ発動し爪を出して鎖を切った。

「さあ どうする？君のように、人間に追い詰められ、行き場住みかを失った動物が俺のいる国に沢山いる・・・俺と来るか？ それとも、ここで人間のストレスの解消の為に残るか？二つに一つだな」

それを聞いて、俺は人間の住みかから離れた。

そして 俺はISを使うために、まず生身を捨て、サイボーグと呼ばれる体に作り替え、IS適性検査を受けた結果フェンリルの2番目に値するサイボーグアニマルとなり、第三世代機 アヌビスと共にこの世界の人間を殺すことである。

「だから、俺の体に傷をつけた人間共を俺の手で叩き潰す!!」

「……へー動物の誇りって奴がまつせいぜい頑張るんだな」

クロはへーと言うような表情で言った。

「……どうする？ 一緒に来るか、それとも」

「いや……もともとオイラは人間に虐待されたことはねーし、まっ何より、オイラは……自分の身は自分で守るぜ!」

「そうか……残念だ……お前をミスクリエーション（出来損ない）として処分する!!」

シバはゼロシステムを解放し、クロの所まで接近した。どうやらブラッドランスでひと突きにするらしい

「お前とは相性がよいと思ってたんだが此処までだ 死ね!!!」

シバの持つ槍 ブラッドランスでクロは突き刺されて、死んだと思
ったが

「……まだだ」

「!?!」

「まだ、終わってねー!!!」

突然、クロの周りから青い衝撃波が放った。

「な 何これ？」

「クロ……?」

一夏と鈴は体をおさえて踏ん張っていた。

衝撃波が消え、姿を現したのは、

「待たせたな!!」

『!!』

一夏たちは驚いた。クロのISは黒の装甲と青と白の線を刻まれたISだが、片の方は黒い所に青い羽のような物が設置されていた。

「初期化と最適化が終了しました。確認ボタンを押してください。」

「何!! まさか コイツ最初から初期設定で戦ってたのか!？」

シバはISジエフティの設定は一時移行前ファーストシフトで戦っていたことに驚いた。

「今度はこっちから行くぜ!!」

シュンッ

「消えた!!」

「アイツと同じくらい速い!？」

「夏と鈴はクロのスピードに驚いた。

「なんだと……だが例え速くなっても奴には勝算はない」

シバも同じくスピードで行った

「コイツがオイラの武器か……前よりはかっちょいいな」

クロが取り出した武器はどれも強化されていた。

「これで終わりにしてやる くらえダークバスター!!」

シバは必殺技を放った。

「おし!!新しい武器を試してみるか……んっこれは」

「これで終わりだー！ー！！！」

「くられー！！ ファイナルストリーム！！！」

クロは大剣を突き出した時、青白いビームを放った。

ビームと衝撃波がぶつかり合い、大爆発を起こした。

シュウウー

「はあ はあ なんとか やったか？」

シバははあはあと息を出しながら、言った。

だが

バコン

「まだ 終わってねー！ー！！！」

突然、地面からクロが出てきて、シバに切りかかろうとしたが・・・
・シバがランスで突き刺そうとしたが、

「何！」

クロのシールドで防ぎ、クロの斬撃はシバの左目の所であたった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

シバは左目に流れる血を見て、

「今回は退却する。あのポンコツもやられたみたいだし・・・・・・・・
だが人間をやる前にお前を殺す！！！」

シバはまるで鬼の形相とは思えない睨みをクロに向けて、退却した。

「ん……?」

「気がつきましたの?」

「ん……セシリア? ……なんだー!? オイラの体がねえ
えー!?!?」

クロは目を覚ました瞬間、ボディはなくなっており、頭だけ残され
た。

「体は織斑先生が損傷の大ダメージがあったから、修理しています
わ」

「はあ、またオイラが気絶してる間、やらかしやがって」

クロはため息をした。

「そっいや、一夏は？」

「一夏さんは隣の所で寝てますわ」

全身装甲のISは一夏は鈴の龍砲で零落白夜という単一仕様能力をワンオフアビリティ出し、撃退したようだった。

「あっとにかくなにか果物を持ってきますわね？」

「ん・・・おお 頼む」

セシリアは医務室から出た。

その頃

「山田先生・・・どうだった」

「はい・・・それが・・・やはり無人機でした コアも調べてみましたが・・・どここの国家にも登録されていないものです。おそらくあの柴犬さんのISにも」

「やはりな・・・」

アリーナに現れたシバそして第一号と呼ばれるフェンリル彼とクロちゃん達がであうのはまだ先の話この続きは待て次回

クロの潜在能力（後書き）

次はクロちゃんとジーさん、バーさんと一夏 鈴 箒 セシリアが
大王デパート編に登場します。

剛くん再び・・・前編（前書き）

書いたーよっしやー烈火竜さん！感想待ってます。

剛くん再び・・・前編

ある晴れた昼さがりクロちゃん、バーさんと一緒にのんびりひなたぼっこをしてる時、突然現れた謎の大男、はたして彼の正体は・・・!?

「私、怪しい物ではありません。大王デパートからの使いの者です。」

大王デパート　そこはありとあらゆる商品が並ぶいわば、天下一のショッピングデパートである。

「このたび、おたくのネコちゃんが由緒あるコンテストにエントリーされました。これ招待状です。」

大王デパートにネコの審査を決める大会とか出来たのかとそう思うクロであった。

「必ず、来てくださいね。それじゃ」

そう言い残し、大男は去った。

翌日、そんなワケでジーさん、バーさんはめいっぱい盛装してやってきました。

だが、ジーさん、バーさんは招待状の地図を見ても、どっちの方向に行けばいいのかわからなかった。クロは知っていた。この二人は恐るべき、方向オンチであることを……

「え〜と、横断歩道を通って、東にまがる……東ってどこじゃ？バーさん」

「東って左の方じゃないの？ジーさん」

（違っつて、東はここだつて）

ジーさん　バーさんは横断歩道を渡り、東の通路を曲がれと書いてあったが、東はどこなのかわからなかった。だがクロがジーさん達を誘導したおかげで、無事に大王デパートに着いた。

「あんりゃ〜」

「でっけーデパートじゃあ」

ジーさん達はこの大王デパートの高さにおったまげた。

「こちらです」

大男は手を振りながら、言った。

「お待ちしてました。では、コンテスト会場にご案内します。」

「ところでうちのクロは雑種なんじゃがのお」

「いーの いーの なんでも、おたくのクロちゃんなら、優勝間違いないし！」

すると、ジーさんのリュックから出てきたクロはデパートの中を見た時

（うわぁ・・・これがデパートってやつか！）

驚いた。

（すっげーまるで巨大な宝石箱だぜ）

クロはデパートの中を見て、クロのテンションはノリノリだった。

「はぐれないようにしてくださいね」

そういつつ、ジーさん達は犬男について行ったが

「見る バーさんいい湯呑みじゃ」

「なんかジジくさいのオ」

ジーさん達は焼き物売り場で立ち止まった。

(おっ)

ジーさん達が焼き物に興味を持っている時、クロはあるものに目をつけた。

それは黒猫のマークが書かれていたマグカップだった。

(ジーさん　　ジーさんこれ買ってくれよ。な　　な)

クロはジーさんにマグカップがほしいと振り回して伝えようとしたが

バキッ

「あーっ」

マグカップが地面にあたって壊れたのだった。

クロは辺りをキョロキョロ見回し、誰かが見たのかと確認した結果、

「ふうーセーフ セーフ誰も見てねー」

誰も見てなかったとクロは確信したが……

「見いゝたあゝぞおゝ」

どうやら見たらしいこの人は警備生活三十五年、天国に一番近い警備員、名をパトロールじいさん通称「パトじい」

「！？」

クロはどつちやらめちゃくちゃに怒っていると感じた。

「器物破損の罪で、打ち首の刑じゃあー！」

パトじいは全速力でクロを捕まえようと走った。

「さがしましたよ」

大男がやってきた

「ありや すまんのオ」

どつちやら焼き物に夢中になりすぎて大男のことをすっかり忘れていたジーさん達であった。

（おい！クロがないぞ）

（どつちする！？）

（とにかく、この二人だけでも捕まえておこう）

ジーさん達は大男の案内で倉庫の所に移動していた。

「まだ先です。その角を曲がります。」

ジーさん達は曲がり角を曲がった時、大男は立ち止まった。

「はい、それでは、あなた達の腕に手錠を掛け、上にあがります。」

「けっこー遠いーのー」

大男は二人に手錠を掛け、服の背中にアンカーを掛けて、そのまま上がった

一方クロちゃんは

「皮はいで 三味線の刑じゃあ！」

パトじいはまだしぶとく、クロを追った。一体、このじいさんどう

いう生命力持ってんだとクロは思った。

「くそ！ー！しつこい」

クロは曲がり角で曲がったが

ドスンッ

誰かの足に当たったらしい。

「ちくしょー 誰だ！今、オイラは忙しいんだよ！ー！」

クロは足の主に文句を言ったが、その足の主は

「ク クロさま？」

「セ セシリア？」

当たったのはセシリアの足だった。

「どこだー！！」

パトじいは辺りをキョロキョロと見回したが、クロはどこにもいなかった。

「くそー！！必ず見つけて皮剥の刑じゃあー！！」

パトじいはまた猛ダッシュで走っていった。

「クロさま、もういいですわよ」

「助かった」

クロはセシリアのカバンの中に隠れていたのだ。

そして、クロとセシリアは最上階の食堂街のコーヒーカフェで一休みしていた。

「本当、驚きましたわ！？クロさまがこのデパートにいるなんて」

「いや、オイラも初めて見た時は宝石箱みたいだと思ったけど、なんだ災難だったぜ」

クロは溜め息をつきセシリアは苦笑いをした。

「ところで、クロさまはどういう理由でこのデパートに」

「えっと、実は」

クロはセシリアにこのデパートで開催されるネコのコンテストのことを話した。

「え このデパートでネコのコンテストがあることは初耳ですわよ？」

「えってことは」

ネコのコンテストは初めからなく、クロはジーさん達が心配になってきた。

「じつしちゃいらねー!?!」

「ク クロさま!?!」

クロはコーヒーカフェから飛び出そうと思ったが、

「あれ？セシリア奇遇だな」

一夏と箒と鈴がいた。

「一夏さん！？ってどうして箒さんと鈴さんがいるんですの！？」

セシリアは一夏に出会って嬉しいと感じたが、箒と鈴がいることは驚いた。

「俺は勉強のノートが無くなったから、新しいやつを買いに来たんだ。」

「わ・・私は2階のスポーツ商品売場の木刀を見ていて、偶然にも一夏がいたから一緒に・・・」

「アタシは三階の料理器具売場で中華鍋を買いに、そしたらたま一夏と出会って・・・」

一夏は当然と答えた。 箒と鈴は照れながら答えた。

「それに、どうしてクロがここにいるんだ？」

「実は……」

クロの代わりにセシリアが事情を説明した。

「えーオジーさんとオーバーさんと一緒にこのデパートに来て」

「二人は謎の大男につられて、行方がわからないのか!？」

「そつだよ。 てかつお前ら順番に言っなよ!!」

鈴と箒はジーさん バーさんとクロが、偽のコンテストの招待状を渡した謎の大男の案内でこのデパートで別れてしまったことに驚いた。

「とにかく、手分けして捜そうぜ。俺は一階の方を捜しに行く。」

「では、私は二階の方を捜す。」

「じゃあ、アタシは三階ね」

「私とクロさまは四階の方を捜しますわ」

一夏はデパートの一階、篤は二階、鈴は三階、クロとセシリアは四階の方を捜すことにした。

「それじゃ、行くぞ　！！」

こうして、4人と一匹のジーさん達の捜索を開始した。

こうして時間が過ぎあつという間にデパートの閉店後になってしまった。

「見つかったか？」

「駄目、捜してもどこにもいなかったわ」

「こっちもだ」

「こっちもですわ」

「どこにいつちまったんだ!？」

一夏、鈴、篝、セシリア、クロはこのデパートをいろいろと捜したが、いなかった。

「しかし、空調切ったデパートってのはなんて暑いんだ。」

「そういえば、もう閉店してるな」

クロ達は大王デパートの閉店に気がついた瞬間、

「はっ！お前ら逃げろ!!！」

突然の床から火が吹いた。

「うわああー」

「夏達はなんとかよけた。」

「誰だあ!？」

クロは腹からガトリングを取り出したが、

ドキューン

なぜか弾き返され、ガトリングはクロの腕から外された。

そして食堂街の所だけ明るくなり、現れたのは、クロをサイボーグにした男。剛とジーさん達を連れ去った。謎の大男がガトリングを装着して立っていた。

「クククク しばらくだったなクロ、ワタシを忘れたとは言わせないぞ。お前をIS搭載のサイボーグに変えてやった男だ」

「んっあれえ?ヨツちゃん?久しぶりー」

「いやいやいや、だっ誰だよヨッちゃんってワシだよワシ、ドクタ
ー剛、忘れちゃった？」

剛はサングラスを取りながら言った。

ババッ

大男は服を脱ぎ、その正体は上の1号のミーくんから2号、3号、
4号、5号がトーマスポールで変装していたのだ

「あいつら、クロと同じタイプのやつ!？」

鈴は驚いて言った。

説明しよう、このドクター剛は自分の軍隊「ニャンニャンアーミー」
で世界征服をもくろむ危ない科学者なのだ。

「まさか・・・あの時、お前に裏切られるとはなク」

剛はあまりの悔しさを思い、震えが止まらなかった。

「飼い犬に手をかまれるとはこのことだー!!!…………ブブブブ」

剛はクロに向かって叫んだが、あの叫びの言葉の笑える所があった
せいか剛は笑った。

「ね……ネコなのにププ……ネコなのに飼い犬ってそんな……」

「何？あいつ」

「ツボにはまったのか」

鈴と箒は不思議そうに剛を見た。

「コラ」

クロは剛に向けて、ロケットパンチを発射し、剛の顔に当たった。

「あいた！」

「博士!!」

「貴様!!博士に手を出すな」

「でも、気持ちはわかるんだよスツゴク」

わかるのかよと思うクロ達であった。

「よし!勝負だクロ」

突然、剛達は戦いのルールの準備をした。

「ルール説明します。クロちゃん一階からスタート各フロアの敵を倒して、ここまで上がってきてください」

剛はルール版の一番上を指した。

「見事ゴールできたら、賞品はこちら!」

隣のカーテンが開いて、出て来たのは、捕らわれて、ぐっすり眠るジーさん、バーさんだった。

「クロさまのおじい様とおばあ様!？」

セシリアは驚いて言った。

「ただし、ゴールできなかつたり、勝負を放棄したら、人質はワタシの実験材料になります。」

「なによ!?!卑怯じゃないの!?!」

「くっ卑怯者め!?!」

鈴と箒は剛を睨みつけて言った。

「卑怯者でけっこうワーハッハッハッ」

剛は大笑いしたが

「じゃ」

クロは諦めた。

「えーっ 帰っちゃうの!?!」

「どうしてですか? クロさま」

「あの二人はお前の大事な人じゃないのかよ!?!」

「そうだぞ……もしワシが二人を無敵の老人に改造するかもしれないぞー?」

剛はクロに脅しをかけたが

「自由……もともとオイラは一匹狼のならず者ぞ」

「狼!?!」

また剛がなにかのツボにはまったらしい。

「人間に魂まで売った覚えはないぜ。あばよ」

クロはこんなバカ話について行けないと去ろうとしたが

「待ちな！」

ミーくんが立ち止まった。

「強がってんじゃねーぞ クロ！・・・こいつらもっておくぞ！」

『！？』

ミーくんの指示で2号の腕が鞭状に延びて一夏達を巻き付け捕らえられた。

一夏達はISを発動したが

「なんだ？」

「ISが反応しない！？」

一夏と鈴は驚いた。どうやら、腕にISを停止する仕組みがあるら

しい。

「お前ら!?!」

「ルールはわかったな!?!」

ミーくんはクロを持ち上げ、

「ゲームスタート!?!」

一番上から、下まで放り投げた。

「フンギヤー」

一番下の噴水の水に落ちた。

「ミーくん!?!」

「心配いらないよ剛くん 奴は必ず人質を助けにくるさ」

クロちゃん対サイボーグ軍団、果たして、クロちゃんはジーさん達

を救えるか、待て後半！！

剛くん再び・・・前編（後書き）

一昨日発売した仮面ライダーのゲームを買って夢中になってました。そして、オーズと新ライダーフォーゼ楽しみです。

剛くん再び・・・後編(前書き)

疲れました。そして暑い

剛くん再び・・・後編

ドクター剛によって捕らえられたジーさん達、クロちゃんはジーさん達を救うことが出来るのか？タイムリミットは1時間、今、3分経過

「もし、この作戦で失敗したら、あなたは組織を脱退、わかりましたね？」

「大丈夫 大丈夫、今回の作戦は完ぺきです。」

モニターに写された秘書は剛に忠告したが、剛は胸を張って言った。

「・・・まあ、とにかく、ご武運を」

秘書はため息をして、モニターをきつた。

一方、クロは噴水の水中に落ちた。

ザパーン！

「デヘーッ デヘーッしつ死ぬかと思った」

這い上がったクロは、溺れ死にそんな感じだった。

その時、

「見つけたぞー！！ 皮剥の刑じゃー！！」

パトじいがやってきて、クロの尻尾を掴んだ。

その時

スポン

ゴロゴロゴロ ドンッ

クロのぬいぐるみが外され、サイボーグ丸出しになり、クロは壁に激突した。

「か・・・皮？」

パトじいはキョトンとした。

そして

「……見……た……な……!!」

「
× !!!?!」

クロはおぞましい顔でパトじいを脅かし、パトじいは失神した。

ガシッ

クロちゃんはデパートにある車を持ち上げ、中のガソリンを一滴残らず、飲んだ。

「プッハーツ」

クロはガソリンを飲み干し、車を投げ飛ばした。

そしてぬいぐるみの中の水を全部だして乾かそうと思いきや、

セッセッ

着るんかい！

「あんニャロー！！ たたっ殺したる」

クロは猛ダツシユでエスカレーターを渡り、2階に向かった。

ステージ2階 婦人服売り場

「さーて、最初の敵はどこだ」

クロは辺りを見回し、探し回ったがいなかった。

だが

「！」

スーツの下に敵の足が見えた。

「バカめ それで隠れたつもりか」

クロはクスツと笑い先に仕掛けて攻撃しようとしたが

ガシツ

「えっ！？後ろにも」

なぜか、後ろから、手が出てきた。

「じゃあ、始めるぞ」

帽子コーナーから、ニャンニャンアーミー2号の姿が現れた。

「わあっ！こっちにも」

クロは驚き、そしてまた腕が現れた。

「わーってめえら何匹いるんだよ」

「一匹だよ」

「!?!」

クロは驚いた。2号の体の両手足は自分の自由自在に伸ばしていたのだ。

「オレさまのIS シャドースパイダーは首、両手足を自由自在にコントロール出来るんだ」

クロは片方の腕を抜き、逃げた。

「無駄だ!!オレさまのISからは逃れられない」

2号は腕をクロに向けて、伸ばし巻き付けようとしたが、

「ホッ」

かわした

クロの反射神経、瞬発力で素早くかわし結果

「最初の敵はまだか？」

「キミ キミちょっと手、貸して！ その後で無視していいから！ 片結びだし ね？」

どうやら、絡まって動けなくなったらしい。2階クリア

ステージ3階 おもちゃ売り場

（遅いなあ〜 なにしてんのかな〜）

ぬいぐるみコーナーで、うずうずしているパンダのぬいぐるみがい
た。

(そうか！ きっと二階で倒されちゃったんだ)

このパンダはニヤンニヤンアーミー3号のIS シャドートランス
の力で変身した姿だった。

「ちえっ そりゃないよなあー これじゃ、パンダに化けて、待ち
伏せした意味がないじゃないか！ もう」

ぶんすかと3階を出て行こうとした瞬間

「ガアーー!!」

「わーーっ」

なぜか動かない筈の恐竜の模型が吠え、3号は腰を抜かした。

「ナースリアクション」

恐竜の口からクロが出てきた。

「そんなに驚いてもらえると、こっちもやったかいたったってもんだ」

クロは恐竜の口の中

に隠れて、運良く、敵が来て驚かしたことで嬉しかった。

「人形に隠れてるなんてズルいじゃないか!!」

「自分のカッコみてから言えよ」

当然である。

「覚えてろよ！ ハゲ」

3号はそのまま、どこかに行ってしまった。

「なんだ？　ありゃ　なんかドツと疲れたわ、人質なんかとりやがるから、もっと緊迫した戦いになると思ってたのに」

クロは呆れて、次の階に行こうとしたが、

「シャーツ!!」

「もげげー」

突然、大蛇が出現しクロは驚いた。

「きゃはは バーカ バーカ、もげげーだつてさ」

大蛇の中に3号が入って、前の仕返しをここで返したのだ。

「悔しかったら ここまでおーいで」

3号はクロにあっかんべえをして、逃げようとしたが、

パカラン パカラン

クロがぬいぐるみコーナーに置いてあった麒麟のぬいぐるみをかぶり、3号の所まで、追いついた。

「きつ 来たなア 負けるもんか!」

さあ一体、どっちが勝つのか？キリンかへびか？

全速力で走り、そして

ゴール！！！ 写真判定 ハナの差でキリンさん

『アツハツハツハツ』

「いやあくいい汗、かいたわ」

「もくクロちゃん、はやいよオ」

二人は汗をかきながら、笑った。これが友情って奴なんだね……きつと

「ドアホーっ！！！」

突然、誰かがドロップキックを放った。

「誰だよ！」

「待ちくたびれて、4階から降りてきた4号じゃー！」

どつやら4号は短期で、ここまで降りてきたのだ。

「おい！！ ポケっとしてねーで、クロを撃ち殺せ」

「慌てない 慌てない」

4号がクロと戦ってる内に、3号はガトリングを装着した。

そして、一匹の麒麟が逃げようとした。

「バイバイ クロちゃん」

3号はガトリングで麒麟を打ちのめしたが

「うん いい腕だ」

「あれ？ クロちゃん」

なぜかクロがいた。

「うん ドサクサに紛れて、キリンさんを着せてやったんだ」

「気の毒な奴だね」

証拠に4号はキリンさんを着て、ピクピクしていた。

バキ ボカ

「ううん クロちゃん会えて嬉しかったよ」

残った3号はクロにコテンパンにされ、クロは次の階に進んだ。

ウイイイン

4階ステージ 本売り場

「えっと 4階の敵は下で倒したから、次は5階だな。なんて張り合いのない勝負だ」

クロは次のステージに行くため、エスカレーターに乗ったが

「ん………なんか速くなってないか」

エスカレーターは徐々に高速になった

「絶対、速いって！ このエスカレーター！！」

エスカレーターはそのまま5階に向かったが

「ぎゃーっ」

突然、爆発した。

5階ステージ 家電売り場

「うん？」

現れたのは、大型ガトリング砲を持ったニャンニャンアーミーの5号と弾薬運搬ロボ ラッシーだった。

「いつまでも寝てると、トドメをさしますよ」

5号は大型ガトリング砲をクロに向かって撃った。

スドーン

「私のIS、シャドーブレインで、このゲームは5階でアナタをこなごなになるといふ筋書きなのです」

「くっそー、見てろー！」

クロは腹から、ガトリング砲を取ろうとしたが、

「あ！ ガトリング砲ないんだった」

ガトリング砲がなかったことを忘れた。

「では、さようなら」

5号はクロにトドメさそうとした時、

チーン ガラッ

「いたーっ!!」

パトじいが見れた。

「はい？」

パトじいはおもちゃのバットを持って、5号の所まで向かった。

「この 化け猫め！ お被いじゃ お被いじゃ」

パトじいは5号をクロだと勘違いして、おもちゃのバットで5号を

ぶっ飛ばした。

「ワシの神聖なデパートから、出てけーっ」

パトじいは5号とラッシーを落とした。

「なんか、知らんが助かったー」

クロは運良く、エスカレーターの中で捕まった。

「よおし！ いよいよ最終フロアだ！」

ファイナルステージ食堂街

「くそ、やっぱり、発動しねー!?!」

「この縄、これも、同じ仕組みになってんの？」

一夏、鈴、箒、セシリアは特殊な縄にかけられ、動かない状態であった

ミーくんは窓で下を眺めた。

「おい！ 貴様、お前たちの目的はなんなんだ」

箒はミーくんに怒鳴りつけた。

「オレたちの目的は人間をすべて、殺しオレたちの理想郷を作ることだ」

やはり、彼も前に出て来たシバと同じ目的らしい。

「だいたい、あんなうすらハゲのどこがいいのよ」

ヒュン

ドスッ

『！..』

一夏たちは驚いた。鈴の隣の壁に包丁が突き刺さった。

「それ以上、剛くんのことを悪く言う奴は、このオレが許さねー」

ミーくんは恐ろしい違和感を漂わせながら、言った。

「あなた・・・なぜクロさまがここに来るとわかるんですの？」

「・・・それは」

「それはオイラにも聞きたい質問だ」

セシリアの質問にミーくんは答えようとした時、クロが現れた。

『クロ!!--!』

「クロさま!!--!」

「なぜ オイラが人質を助けにくるとわかった？ 対決の前に、それだけはきいておこう。ミーくとやら」

「……確かにお前は人間の為に命を捨てるようなヤワなネコじゃねー……その辺はオレも同じさ、」

バキッ

ミーくんは突然、ガラスを拳で壊した。

「人間に飼われてるなんて……ヘドが出る。つまり、オレたちは似た者同志なのさ」

「クロ」

一夏は真剣な表情で見た。

「だから、よくわかるんだ。お前にはあの人質にカリがあるだろう。借りたカリは返さなきゃならねえ……例え……相手が人間でもだ！！」

ミークンは右腕のブレスレットを上にかざした

「それが俺達、雄猫の「誇り」って奴だからよー」

ミークンの周りから光が出て、クロ達は目をつむり、開けた瞬間、

「!!!」

「これが、オレのIS、シャドーストライクだ」

「あいつもIS使いか、だったら」

クロもISを発動したが

「あれ？ クロさま この階に来るまで、ISとか、使わなかったんですの？」

「いや、アイツラ、とても、弱かったから、ISを使う事もなかったな」

セシリアの質問にクロはこの階に来るまで、一度も発動しないで、

進んだのだ。

『いくぞ！』

クロとミーくんは剣を取り出し、剣と剣がぶつかった。

ガッキイイイン

「コイツを受けて見る！！クロ 奇技 猫爪」

ミーくんは剣を一回降っただけで、三発の斬撃がクロに襲いかかった。

ガキンツ ガキンツ ガキンツ

一発、二発は受け止めたが、三発目は受けきれなかった。

「うわっ」

クロの剣が離れ、クロは柱にぶつかった。

「とどめだー！」

ミーくんは、次の一閃でとどめと思いきや、

ビシッ

真剣白刃どりでなんとか、受けとめた。

「なにっ!？」

「おお」

ミーくんは驚愕し、筈は、お見事と思ってた。

「ムギキギギ」

ググ・・・

「こっつ! こんのヤロー」

ミーくんは剣を突きつけたが、クロは踏ん張り耐えた。

さらに

ガシヤ

「何!?!」

クロの尻尾から、ミサイルが発射され、ミーくんを直撃した。

「うわああああ!?!」

ミーくんは一番下まで落ちた。

「ふー案外たいしたことねー奴だったな」

「クロさま」

「クロ」

「お前ら、今、解いてやるからな」

クロは一夏たちのロープを解こうと行こうとしたが

バシユューーン

「!?!」

クロは驚いた。ミーくんのISはまるで、騎士の姿をした、機体だった。

「今のオレのIS、シャドーストライクを改名、ランスロットと称する」

「初期化と最適化が終了しました。確認ボタンを押してください。」

「まさか、奴は初期設定だけで戦ってたのか、気をつける クロ
今の奴は前の奴とは違つぞ」

箒はあわてて忠告した

「行くぜ！」

ミーくんの専用武器ナイトレーザーソードを出した。

「はああああー」

ガキンッ ガキンッ

「うおっ うわっ」

ミーくんのランスロットは最速のスピードでクロを圧倒した。

「オレはなあ！ 昔 剛くんを命を助けてもらったんだ」

ズバン

柱は簡単に切り裂いた。

「だから！ 剛くんの世界征服の夢は・・・オレが叶えてやるんだ！」

「雄猫の「誇り」ってやつもラクじゃねーな まあ せいぜい頑張りな」

クロはどうでもいいと言うような表情で言った。

「そういう お前はどんな力があるんだよっ」

「オイラのはああ・・・教えられねーよ！」

クロの横一閃でミーくんの剣は切り裂かれ、柱も切られた。

グラッ

柱を壊した所為か、上からガレキがミーくんの方に落ちた。

「クロー！？」

一夏は驚愕した。

ズズーン

「くそ これまでかっ……!!」

ミーくんはガレキの下敷きになり、ここで死ぬと思ったが

「おい さっさと出るよ」

「!!」

「まだ ご主人様にカリは返してねえんだろ？」

ミーくんは驚いた。クロが踏ん張って、ガレキを持ち上げていた。

ミーくんはクロを押して、なんとか脱出できた。

その時

「ミーくん」

剛が現れた。

「やったなー トドメをさしたかミーくん!」

「・・・」

バシャーン

ミーくんはクロを頭突きでクロを突き飛ばし、クロは真つ逆様に落ちていった。

「ハツハツハ 約束通り、人質はもらっていくぞ クロ!」

「うそーっ」

クロはまた噴水の所に落ちた。

「クロー!!」

「クロさま!!」

「クロ!!」

「クロ!!」

一夏たちはクロが落ちて、叫んだ。

「さあ ミーくん お迎えのへりだ 行くよー」

剛はジーさんとバーさんと一夏たちを引っ張ってへりまで向かった。

(クロ・・・)

「!!」

(剛くん・・・本当にごめんね)

コン

ミーくんはクロが使ったガトリングが落ちていて、それを下から落とした。

「！」

クロは落ちてくるガトリングを右腕に装着し、そしてラッシーをセツトし、ISジェフティを発動した。

チーン ガラッ

「あっ！」

パトじいが見れた。

「おい ジーさん、さっさとオイラにおぶさりな、ミンチになっちまうぜ」

ジーさんはクロの言うことを聞いて、おぶさり、クロはゼロシステ

ムを発動した。

剛はへりの所まで、いった

「オーライ オーライそのまま そのまま」

へりは下まで降りたが

「あり？ コラー上がるなー」

「あのね 剛くん、下がってるのは、僕たちなんだ」

「あ ほんとだ なんで？」

『まさか！..!』

「夏たちはもしかしたらと思いきや、

下では、

「うおおおおお」

クロのガトリングはISを発動した時、その力は強化され、必殺技
ブレイブランチャーを撃ちまくった。

「死ねっ 死ねっ 死ねっ 死ねっ 死ねっ 死ねーっ」

クロの暴走で周りの建物、商品が壊されていった。

そして

「ん？ 見る バーさん やっぱりクロがコンテストで優勝したぞ」

「うむ さすがじゃね」

デパートはガレキだけに残ってしまい、ジーさんとバーさん以外の
人達は全員、のびていた。

王冠はしっかり家に持って帰ったとさ。

その翌日、IS学園では、一夏たちは門限を破り、一週間、放課後、居残り授業をさせられたらしい。

「あのー織斑先生、スーツを着た人達がこの一通の手紙を渡されました。」

真耶は手紙を千冬に渡され、開いた時、千冬は険しい顔になり、真耶に渡した。

「……………読んで見る」

真耶は手紙を見た時

「この度、大王デパートの全壊は、IS学園の猫だと、確信し、その責任として請求書　　億……………えーーーーー」

驚愕した。

「全く、あの馬鹿猫め大掛かりなことをしおって……………山田先生、

クロは「

「はい 今日、クロさんはお休みだと、明日くる予定です。」

「なるほど」

パキポキパキポキ

千冬は腕を鳴らし、真耶は震えた。

一方、クロちゃんはジーさんとバーさんと一緒に日向ぼっこをしていた。そしてこの先はまた次回！！

剛くん再び・・・後編（後書き）

仮面ライダーオーズ一体、どうなるのかフォーゼ楽しみます。

地獄のハイウェイ（前書き）

今回は一夏たちは出ません。そのかわり彼が出てきます。

地獄のハイウェイ

よっ オイラ猫のクロ実はサイボーグなんだ。

だからってワケじゃないけど、いろんな特技を持っているぜ

カチャカチャ

「よし 修理完了」

IS学園に通ったお陰で技術の授業は、真面目に受け、テレビ、ラジオ、他の物を直したり、作れることができた。

「ただいま クロ」

そして、この二人はオイラの飼い主だ。

「今度はこんないい自転車が捨ててあったぞ。こいつも直してくれ」
もちろんオイラがサイボーグだってことには、まだ気づいてないんだ。

「まったく、猫ってのは便利なもんじゃのう」

「こんなことなら、もっとはやく飼っとればのお」

（だーから、フツの猫はこんなことしねーっつーの）

そう、思ってもクロは自転車を修理した。

あつそーそ、後この他にオイラを勝手にサイボーグに改造したうえに勝手にオイラを目の敵にしているアホ科学者がいるんだけど・・・今頃どこで何を企んでいるのやら・・・

213

ここは人間たちが捨てたゴミが沢山あるいわゆる夢の島という所だ。そこに科学者となるサイボーグがいた。

「では、組み込むぞついに完成した「悪魔のチップ」を！！」

「これでクロの奴をメッタメッタにしてやれるね。剛くん」

剛は悪魔のチップ略すとデビルチップをミーくんの体の中に装着した。

「フウ・・・」

「どうしたの？」

「なあ ミーくん、自分で造ったサイボーグにも勝てない科学者に、組織を脱退され、世界征服なんて、無理なのではないだろうか」

剛は組織を脱退^{クビ}され、今はこのゴミ地に生活することにした。

「だから 今度こそ、勝とうよ」

「いいトシこいて、「世界征服」なんて笑われないかなあ」

ミーくんは慰めたが、剛は苦笑いした

ボカンッ

「人がどう思おうとカンケーないだろ！！剛くん！！ 夢ってのはねえ人に自慢する為じゃなくて、自分との戦いなんだよ！！」

ミーくんは剛を殴り、夢の大切さを教えた。

「そうだった・・・そうだったよミーくん!! すまないっ」

剛をそれを知って、大泣きした。

「さあ、顔上げて、ダメだよ 弱気になっちゃ、剛くんには、いつだって僕がついてるんだから」

「うん」

こうして、彼ら二人の逆襲がクロに襲いかかるといってんでもない戦いが始まるのであった。

「ほんじゃ 留守番、頼むわ。サイクリング行ってくるでな」

「ニヤ〜ゴ）もう粗大ゴミ拾ってくんなよ〜」

ジーさん達はサイクリングに行った。

「さてと、今の内にオイラは自分の体のメンテナンスだ」

クロは、ドライバーを出し、メンテナンスを開始した。

「フッフッフ、また会ったな クロ」

現れたのは、メキシカン風の剛とミーくんであるわかりやすく。

「ミーくん」

「剛くん」

『二人あわせてー』

二人は回り、最後の決め台詞の

『アーミーゴー』

言い放ち、最後に爆発した。どんだけ火薬つんだのかというほどの量で

「終わったら、片付けな、^レ近所に迷惑だから」

クロはNOテンションで、言った。

「まあいい、さっそくだが」

「勝負だ クロ！」

二人は衣装と台座を片付けて言った。

「しっかしまあ付き合いいいね。 ミーくん、そんなうすらはげの相手してたら疲れるだろ」

ドカカカカ

「口を慎め。 剛くんは命の恩人なんだ。 お前が老人二人を、守るよ
うにオレは剛くんを命がけで守る」

ミーくんは家の柱を三発入りのボウガンで打って言った。

「何度も言わせるな・・・」

クロはメンテナンスを終了し、立ち上がった。

「オイラは人間の為に命なんか」

クロは飛び上がり、そして

「ただいま　こらクロ急に飛び出したら、危ないじゃろ」

「てめー顔赤くして

何やってんだよ？　あん」

ジーさん達が帰ってきて、クロは赤くしながら、矢を受け止めた。

「フッフ、我々がここに来たのは偶然ではないのだ」

（そりゃ　そーだろ）

「勝負だ　クロ」

(さっき 聞いたって)

クロはそう思ってる瞬間

「うわっ」

ミーくんはジーさん達付きの自転車を持ち上げたのだ

「へへん ちよいと あずかるぜ」

ミーくんの背中から4本のアームが出てきて、自転車をバイクへと改造し、ジーさん達は何故か若い頃の自分と思うようにバイクに乗った。

「うおーっ」

クロはびっくりした

「ワハハ ついてこれるか クロ！」

「行くしかねーだろクソッ」

クロはミーくんの後を追った。

「ガハハ これが生まれ変わったミーくんだ。あらゆるメ力を取り組んでスーパーウエポンに変身するのだ」

剛が一人でミーくんの説明をした時

ト
ト
ト
ト
ト
ト
ト
ト

「ん」

「とりあえず、お前を殴っとく」

クロは逆方向に走り、剛をぶん殴った。

「よし 待ってるよジーさん バーさん、今 いくぞ〜」

切り替えて、クロはミーくんを追った。

ハイウエイ

パラリラ パラリラ

ハイウェイで走る派手な二人が車をすいすいと避けながら、進んだ、明らかに騒音迷惑である。

「！」

だがジーさん達が乗るバイクを見て、驚いた。

「コラー ジジイ、俺様より目立つんじゃないー」

「おっ 使えそうだな」

ミーくんはまたアームを出し、車の使える部品を奪った。

「レッシェー」

ミーくんのマシンはパワーアップした

「明日から マジメに働こ」

「おっ」

一方クロちゃんは

クロ コヤマトの上に乗っていた。

「はっ
「！」

ミークんにやられた車の残骸である

「うゝむ さすがに不安になってきたな」

クロは車の上から、ぴよんぴよんと渡り、見た物は

「どしえー！」

ミーくんマシンは大型トラックを超える車になった

「ん!？」

マシンに付いた砲撃砲がクロに向けて撃った。

「ひゃっ」

クロは車から飛び出すと思いきや、割れたガラスから運転席のハンドルを握った。

「わーっ!」

運転手はビックリした

さらにクロは鮮やかな運転テクニックでミーくんマシンの攻撃をか
わした。

「おい! アクセル踏みっぱなしにしとけよ!」

「ハイ」

クロはISジェフティを発動した。

「おおー」

運転手はクロが発動したISを見て驚いた。

「コラッブブレーキから足はなせー」

「あっスンマセ〜ン」

「ね〜ママ、あのおじちゃん、カッコいい姿をしたネコとお話して
るよ」

「また この子は」

「よ〜し ハンドル預けたぞ」

クロは運転手にハンドルを預け、強化ガトリング砲 ブレイブラン
チャーを装着し

「今度は、こっちのばんじャー」

クロはランチャーを連射し、マシンを攻撃しまくった。

（何故だ？ 何故彼はあの有名なISを使えるんだ？・・・そうか彼の体は機械なんだ！」

クロは攻撃し続けたが・・・御守りをチヨイチヨイした。

（そして、ネコの心も忘れてないぞ・・・このネコはもしかして）

「突然ですが、僕鈴木イチローです。弟子にしてください」

「よし！ 弟子にしてやる！ 早速だが、車を寄せる！」

「了解」

鈴木はマシンの近くまで行き、クロはマシンの上に乗った。

「よし 帰っていいぞ鈴木」

「グッドラック」

鈴木は指示通り、マシンから離れた。

「来たな！ クロ このオレに勝てると思ってるのか！」

「あつたりめーよ」

クロはランチャーを走りながら連射した。

「うおおおおお……！」

ドカーーーーン！

「クッ やるじゃねーか クロ……しかーし」

マシンからアームが出て、クロを掴んだ。

アームが腕力をアップし、クロを握りつぶそうとした。

その頃、ジーさん達は

「快適な旅じゃな、ジーさん」

「ちよいと、揺れるがの」

別の所で景色を堪能していた。

「アリア？ あれクロでねーか」

クロはジタバタして、暴れていた。

「おーい クロー ジーちゃんだどー」

「バーちゃんだどー」

パカ

尻尾から、ミサイルを出し、アームを破壊した。

クロは道路から落ちると思いきや

鈴木の子の助手席に落ちた。

「しつかり、師匠」

「うーん、でかした鈴木……」

「師匠！ 僕ね！ 僕ね！ ガンダム世代なんスよ！」

「なんの話だよっ」

同じく

(うーむ 困ったぞ ガトリングは落とすしちまったし、シッポのミサイル後二発しかねえ 何か方法を考えないとな)

「まさか本物のガンダムの弟子になれるとはやっぱり、ダブルオーとユニコーン買って正解でした。しあわせっす」

クロは考え中に鈴木がガンダムの話をしたが

「テメー黙って、聞いてりゃ、ありゃモビルスーツだろ！オイラはIS搭載のサイボーグだ」

「もおゝ こまかいつすよ。師匠」

一方ミーくんは

「くうゝゝっ 流石はクロ、手応え十分だぜ」

クロにやられた部分を見て、驚いた。

「むっ 燃料切れか」

ミーくんはメーターを見て、驚いた。

「よし、その燃料タンクもらっせ」

ミーくんは隣のトラックのタンクを奪った。

「ついでに大改造だ」

ミーくんはあらゆる車の部品を奪い、

「どっけ どけえ!!」

マシンの所にミーくんの顔が出来上がりマシンは大型モンスターマシンになった。

「あんのー腹減ったんじゃが、食堂車はどっちかのー」

ジーさん達が運転室に現れた。

「はあ？ なーにが食堂車だ!!! とつとつ、席に戻らんかいクソボケエ」

ミーくんはジーさん達にすげー暴言を言い放ち、ジーさん達は

「バーさんやっぱり世間さまは年寄りに冷たいのぉ」

「家から出ずに茶すすつとりゃよかった」

「ワシらは粗大ゴミじゃー」

「あ・・イヤそんなことないですゴメンナサイ」

べつやら、ジーさん達の心を傷つけたらしい

「あ・・・あのーお客様・・・？ 当店では大型車両は・・・」

「あ？ テメーンとこのドライブスルーは客 選ぶんかい！！」

「ジーさん、ワシ ハンバーガー食つの初めてじゃ」

「ワシもじゃ ドキドキするのー バーさん」

マツ　で店員に文句を言うミーくん　初めてのハンバーガーを食う
ことにドキドキするジーさん、バーさん

「ほら、アンタら早く注文して！・・・む!?」

ト
ト
ト
ト
ト
ト
ト

「勝負だミーくん!!」

ジーさん達の注文を待ってる途中、鈴木の車の上にクロがISを発
動し、強化大剣、ゼロソードを構えながら、突進してきた。

「望むところだ　クロ」

「お客様、おかんじょー」

ミーくんはジーさん達の買い物が済み、クロの最終決戦へと向かっ
た。お勘定わすれて

ブオオオオオオン

モンスターマシンに突進して来るクロ&鈴木

ズドドドドドドド

それに襲いかかるうとするミーくんが操るモンスターマシン

「寸前でかわせよ！！ 鈴木 死ぬぞ！」

「まかせてください師匠！ こうみえても「サーキットの狼」世代
ツス！」

えっ お前 ガンダム世代ってどっちなんだよと思うクロであった。

「ペシャンコにしてくれるわー！！」

モンスターマシンがペシャンコになる寸前、鈴木の運転テクニク
でかわし、そして

「もらったあー!!」

キーン

「どわーっ!!」

綺麗に真っ二つに切り裂かれた。

クロは燃料タンクの上に着地した。

「ジーさんやー」

「バーさんやー」

真っ二つに切り裂かれた所を踏ん張るジーさん、バーさん

「クソーー!!」

ミーくんは車両を離さないように掴み、そして

「ウオリヤアアア」

根性で何とかピッタリに戻った。

「あんにやる ムチャクチャな事しやがる!!」

ミーくんは急いで修理に取りかかるが、

「運転手さん、便所はどこじゃ!!」

「ベンジヨ?」

「バーさんが酔ってゲー出そうじゃー」

「んなにー!!?」

どうやらあの時、切り裂かれた時に酔ってしまったらしい。それを聞いたミーくんはとうとう怒り爆発した。

ガキツ ガンガン

「もういい バーさんそこで 出せ」

「バカー くじけんなー!!! バーさん ファイト! 今できる
!」

お年寄りを怒ってもなんか悪いので、大急ぎで便所を作った。

一方、クロちゃんは

「鈴木~~~~ こっちこっち」

クロは鈴木の子に着地した。

「師匠 あれが燃料タンクですかね？」

鈴木はモンスターマシンの後ろにある燃料タンクを見た

「あんな巨大なタンクに引火したら、ひとたまりもないなあ」

「おーし だったら、これをくらいやがれ」

クロはゼロシステムを発動し、尻尾からミサイルだした。

「し・・・師匠!? この距離では我々が・・・!」

「ゼロシステム発動モードのミサイルだくらいやがれ」

「あー!」

ミサイルは発射された

「よし できた 自信作だぞ バーさん! ここでおもいつきりゲ
ーって・・・ん!?」

ピカッ

ドーーーーー

モンスターマシンは大爆発を起こした。

そして、ジーさん達は

「大丈夫か バーさん」

「飲んでもーた」

どうやら、ジーさん達は無事であり、バーさんはゲーを飲んだらしい。

「死ぬかとおもいましたよ 師匠！」

「オイラもだ」

車は半分だけ壊れ、運良く、二人は無事だった。

残骸の跡にミーくんがいた

「勝負ついたな ミーくん」

「てめえ あんなムチャしゃがって、人質がどうなってもいいのか？」

「これはオイラ達の戦いだろ？ おまえのことだから人質が一番安全な場所に確保してるに、ちげーねーからな」

「ふっ……おめえにや かなわねえよ」

「ところで、おまえって昔から、便器だったか？」

「ふっ 福祉とか過保護とか、いろいろあんだよオレにも」

「そうか じゃな」

クロが立ち去ろうとした時

「わーっ！ー！ー！」

クロとミーくんが合体した

「ふっふっふ 油断したな クロ！ お前という最強の兵器を取り込んでやったぞ！」

クロの体はミーくんの思うがままになった。

「それ アンドウートロー アンドウートロー」

「て・てめえ」

ミーくんはバレリーナのダンスを初め

「ハイ クロちゃん 兎飛び 二千回 うははは」

「頭来た」

ミーくんは嬉しそうに笑い、クロは切れミサイルを発射した。

「わー！ 何する気だ クロ！」

ミサイルはミーくんの所に向かった。

「こっちに向かって来るぞ！！ 逃げろー」

ミーくんは逃げようとしたが

「へっへっいいからじっとときなって」

どっちらクロはミーくんの思っがままに動くと思ったが、どっちら
否定したらしい

「ギャー——」

ドカー——ン

ミーくんはミサイルに当たって爆発し、クロは頭と上半身は無事だ
ったらしい

「師匠——！！」

鈴木が駆けつけた。

「大丈夫ですか？ 師匠」

「大丈夫じゃねーよもうボロボロだ」

「師匠、今回の敵は恐ろしい敵でしたね」

「ああ ジーさん達を連れて、とっとと帰ろうぜ」

「はい」

こうして、ミーくんの新しい力に圧倒しつつあったクロちゃん、仲間になった。鈴木イチローと一緒に撃破した。

数日後ISS学園では

新聞の記事にこう書かれてあった。

「モンスターマシンと激闘し、勝利した黒猫、だが、ハイウェイの所にでかい大惨事があったため、結果は無効となった」

「織斑先生！！ 大変です。」

「どうした？ 山田先生」

「新聞社の皆さんがインタビューしたいと押し付けて、いるのですが」

「どうやら、クロのことである。ISを発動し、IS学園の者だと認知され、それを記者たちはインタビューしてきたのだ」

「………追い返せ」

「はい」

千冬の命令で真耶は急いで行った

「はあ……まったく、とんだ事をしてくれたな アイツは……」

千冬はまた、ため息をついた

一方クロは

「クソー まだ部品が足りねー ジーさんもつと粗大ゴミ拾ってきてくんねーかなー」

クロは床の下で粗大ゴミの使える部品を取り出し、修復していた。

「クロのヤロー 覚えてろ!! 剛くん 僕はここだよ。早く来てー!!!」

ミーくんはチップになっても意識は残ってた

ほんとにしつこい二人組だったねーまた二人組はクロちゃんに挑戦するの? まで次回!!!

地獄のハイウェイ（後書き）

次は空飛ぶあの親子が登場します。

空飛ぶ親子ロボ（前書き）

今回は長く書きました。

空飛ぶ親子ロボ

ここは剛とミーくんが暮らしているガラクタ置き場

「ククク ついに完成したなミーくん」

「これでクロの奴をメツタメタにしてやれるね剛くん」

どうやら、二人はクロちゃんを倒す為のある物を作ったらしい

「ついにムフフ」

「とつとつウフフ」

ヒソヒソ話をしてほんとあんた達は懲りないんですね？

『えー！ー懲りませんとも！ー！』

こっちに怒らなくても

「では、新兵器の御披露目だ」

剛は切り替えて、ミーくんはドキドキしながら待った。

「いでよ ビッグ・サム」

現したのは巨大で二本のアンテナを持ち、顔にはモノアイがあるロボットだった。

「世界征服も可能な夢の巨大ロボット、それがビッグ・サム」

剛は気合いを入れて紹介した。

「そして、こっちがスモール・サム」

剛が出したのは、ビッグ・サムのチビサイズのロボットだった。

「この巨大ロボの手にかかればクロなんか「プチュ！」だ」

「そーだ そーだ「プチュ！」だ」

二人は勝利のポーズをしながら言った。

「題して『ビッグ・サム・スモール・サム大作戦』~~~~~!」

「ヤッターって剛くん、こっちの小さい方はなんのためにいるの？」

ミーくんはスモール・サムを指差しながら言った。

「おーさむ・こさむのギャグを言うためにはどうしても、必要だったんだよ。ミーくん」

「ふーん」

だったら作るなよ。

「では、早速乗り込もう。ミーくんのスモール・サムのスイッチを頼む」

「オツケー」

ミーくんはスモール・サムのスイッチを押した。

ブゴゴ ブゴゴ

バタバタバタ

「プピー　　プピー」

スモール・サムは、動き始めた時、クルクル回った

バビューーーン

スモール・サムはどこかに行ってしまった。

「行っちゃったよ。剛くん」

「うそっ！　まあいや　ぶっせ、ついでに造ったんだし・・・ど
っ！っ！っよ」

剛はビッグ・サムのコックピットに乗り込んだ。

「安全ベルト装着！」

ベルトを装着し

「発進！！」

レバーを動かしたが

シーーーーー

「あれ？」

何もなかった

「おっかしいな もう一度点検するか」

剛は説明書を読み直した時

ギギイ

「あっ動き出したよ剛くん」

「えっ！？ ワシ何もしてないぞ」

「ワタシ・・・ノムスコ・・・ハドコ・・・？」

「！？」

剛は驚いた。ビッグサム（オーサム）は一人でに動き出したのだ。

「ワタシ・・・ノカワイイ・・・コサム・・・ハドコ？・・・ドコオ
ー！？」

オーサムはコサムを追いかけようと走った。

「わーっ」

「剛くんどうすればいいのー！？」

ミークンはオーサムの体にしがみつかみながら質問した。

「ボタンだ！ 背中 of 緊急停止ボタンだ！」

「これだな？」

バチン

ミーくんは緊急停止ボタンを押したが

ビーツビーツ

「？」

「時限自爆装置が作動しました。」

「そんなにーッ！！」

「三分以内に避難して下さい　メガトン級の大爆発です」

どうやら間違っつて自爆ボタンを押したらしい、それを聞いた剛は驚愕した。

「剛くん、本当のボタンはどこー！？」

「えーと えーと……しまった〜！ そんなボタンつけてなかった〜」

どうやら剛は非常時のための装置は作ってなかったらしい

「爆発まであと二十秒……」

「もう時間がないよ剛くん」

「そ……そうだがここはひとまず、タイマーを引き伸ばしてくれ！」

ミーくんはタイマーを引き伸ばそうと腕をのばしたが

ズルッ

「わーいー」

「ミーくん」

オーサムが走っていた為、ミーくんは落ちてしまった。

「3 2 1」

「もう駄目だあ〜!!」

剛は頭を伏せたが

ガチン キリキリ

「剛くん二十四時間後にセットしたよ〜」

「うえ〜ん ありがとうミーくん」

ミーくんは引きずりながらもタイマーを二十四時間後にセットした。

ツルっ

「ミーくん!!」

ミーくんはオーサム体から手放され、ミーくんは転げ落ちた。

「くっ」

ミーくんは立ち上がり

「剛くん!!」

こうして、ミーくんが剛博士救出のためクロちゃんとISS学園に協力するハメになるのだった。

次の日

ISS学園では

「織斑先生！！ 大変です！！」

「どうした？ 山田先生？ またクロが何かやらかしたのか？」

「いいえ、違います。街の方から巨大ロボットが暴れてるという情報が……」

真耶は慌てて、説明し、それを聞いた千冬は……

「すぐに代表候補生を集める！！」

千冬の命令で代表候補生、一夏、鈴、セシリア、一応、箒もいた。

「昨夜、管理のものから、巨大ロボットが出現したという情報だ」

『巨大ロボット！？』

千冬は、巨大ロボットオーサムを映し出した。

「これが巨大ロボット？」

「なんか、昔を感じるな」

鈴と一夏は感心しながら言った。

「そして、この巨大ロボットには、ISの反応はなし、よって、ただの暴走ロボということだ。」

千冬は興味なさそうに答えた。

「あれは……山田先生！！ロボットの一番上にある丸い所を拡大してください。」

「え はい」

真耶は急いで、拡大させた

「これは……操縦席か？」

箒は不思議そうに見た。

「だけど、一体、誰が操縦をしているのでしょうか？」

セシリアは不思議そうに言った時、思わぬ人物が映し出された。

「あっ あいつ!？」

『ドクター剛!?!』

剛が映し出された。剛はコックピットで眠っていた。

「なんだ？ お前達、知り合いなのか？」

千冬は不思議そうに質問した。

「こいつはあたし達をとらえて、改造しようと思んだ悪の科学者です。」

鈴は剛のことを説明した。そして一夏達は千冬に剛のことについて、説明した。

「なるほど・・・大王デパート事件、暴走マシン事件は奴らの仕業ということか？」

千冬は感心して答えた。

「どつするんですか」

セシリアは剛をどつするかを質問した。

「……捕らえて、組織のことをはかせる!」

――――

その頃、クロちゃんは

「ん〜っ
いい朝だ」

クロは背伸びをして目覚めた。

「空は澄みきってる」

青空を見て

「小鳥はさえずってるし」

小鳥を見て

「街でロボットは暴れてるし」

暴れるロボットを見た。・・・ってそれ非日常だろ

「クローツ！！」

「わーっ」

突然、ミーくんがクロの家に来て、飛びかかった。

数分後

「とうわけなんだたのむ！ 剛くん救出に力をかしてくれ！
お前しか頼れる奴はいないんだ！」

ミーくんはクロを揺さぶりながら、頼んだ。

「自業自得ってやつじゃねーか だいたいオイラ あいつ嫌いだし」

クロは関係なさそうに鼻をほじくりながら答えた。

「クソー」

ミーくんはクロを殴った。

「おまえにはわかってるはずだ。オスネコにとって飼い主を死なせることがどういうことか！」

「刺さった 刺さった鼻に刺さった」

ミーくんはクロをオスネコの飼い主のことを殴りながら説明し、クロは指が鼻に刺さったまま聞いた。鼻血を出しながら

「クロー ちょっとくら釣りに行ってくるわー」

ジーさん達は釣り道具を持って出かけていて行った。

「ニャーゴ(行ってらっしやい)」

「もし剛くんが死んだら、オレはキン もいでメスネコになる」

ミーくんは涙を流しながら行った。

「ちっ この力ではかいぜ？ 必ず返してもらっぞ」

クロは仕方なく協力することにした

「いいな!？」

「急ぐぞクロ」

「あ! コラ 返事は!！」

こうしてクロとミーくんの剛くん救出作戦が開始した。

その頃一夏達は剛の捕獲作戦、およびロボ排除作戦を開始した。

「あれか・・・」

一夏はオーサムを見ながら言った。

「みて、下に戦車がぞろぞろ出て来たわ」

「陸上自衛隊もこの作戦に加入するつもりらしいですわ」

鈴とセシリアは下からぞろぞろ出て来る戦車を見た。

「撃てー！ ISに手柄を奪う前に我々の底力を見せてやれー」

隊長 中松の指令によって戦車は突撃したが

ポコーン

あっという間に蹴り飛ばされた

「くそお！ わ・・・我々の底力を・・・」

もう一回、突撃したが

ポコーン

ワンパターンと同じ結果になった

「浅い底力だったわねー」

鈴は呆れたように言った

「ん・・・あれは」

「夏は下を見下ろし

「クロ？」

クロとミーくんがオーサム在所まで向かったそれをIS学園のモーター室では

「あれはクロさんともう一人は」

「……あいつら」

状況は変わりクロ達は

「それにしても、ハタめーわくなものを造ったなあのはげ」

オーサムはクロ達に向けて液を吐き出した。

「危ない！ なんでも溶かす液だ！」

ミーくんはクロを押しして回避した

さらにまた液を吐き出し

「危ない！ なんでもとかす液だ！」

クロはミーくんを蹴り飛ばして回避した。

オーサムは戦車に向けて液を吐き出した。

「危ない！ なんでも溶かしそうな液だ！ 逃げろー！」

隊員達は外から出て、戦車は溶けていった。

「おいつなんかアイツ、口溶けてるぞ ほっときゃ、消えてなくなるんじゃないの？」

「そ・そーなのか？」

オーサムは腹の所に液の残りがかけられていた

「クローー！」

『!?!?』

—夏達が現れた。

「クロさまもここにきていらしたんですの」

「もの好きねー」

セシリアと鈴は不思議そうに言った

「パギヤー!」

「わっ 暴れ出した」

オーサムは暴れ出した。

「やっぱり、止めるしかねーな」

「まてよ!?!?クロ」

クロはオーサムの所に行こうとした時、一夏の声に立ち止まった

「なんだよ？」

「コイツはあの科学者のサイボーグなんだろう？　なんで一緒にいるんだよ」

一夏達はミーくんを睨んだが、クロは

「まっコイツがどうしても大切な人を助けたいって言うから手伝っているだけだ」

「クロ……」

クロの言葉にミーくんは励ましの言葉にしか聞こえなかった。

「ほら　行くぜ！　ミーくん」

「あ　ああ……」

二匹は同時に、ISジェフティとランスロットを発動した。

「コックピットはどこだ!？」

「頭のとっぺんだ」

二匹はとっぺんに到着した

「どこか」

とっぺんに剛が眠っていた。

クロは両腕だけISを発動し、剛を殴った。

「オラア!! 止めろっ! 止めろっ!」

クロは剛に右フックを炸裂し、今度は左ジャブをくらい、ワンツーをくらい、右アッパーを炸裂した。

「いや だからさ、それができりゃ、アンタ……」

ミーくんは止めようとしたが、クロは最後の右ストレートを剛にくらわした。

「さてと、ジョーダンはこの位にして……と」

「ジョーダンかい」

ミーくんはずっこけた

キイイイイイン

『ん!?!』

ドゴーン

オーサムの目の辺りが爆発した。

「いいぞ 目を狙え！巨大ロボの弱点は目に決まるとる！」

自衛隊は新しい戦車に乗って砲撃したようだ

「てーーーーっ」

また砲撃してきたが

「またオレ達に向かって来てるぞ」

「……ったくしゃねーな」

クロはゼロソードを出し、

「オラア！」

ザキイイーン

ドドーーーーーン

砲弾は切り裂かれ、爆発した。

「おおっ！ クロかつちよいい 次オレにやらせろー」

「よい子はマネすんなよ」

ミーくんははしゃぎ、クロはクールに決めた。

「隊長！ 戦車砲 効きません。」

「くそっ バリアか」

中松は戦車の中に潜り、首に巻いている鍵を持った。

「やむをえん！」

「隊長 まさか……！！」

「核……メガトンミサイルを使おう」

中松は唾を飲んで使おうとした瞬間

「努力しろよ もー少し」

クロが戦車の中に入って、中松に回し蹴りを炸裂した。

「なんだ！？ 気のせいか！？ 今ネコに回し蹴りをくらったよう
な」

中松はキョロキョロしながら言った。

「本部から連絡だ………おかしい 切れた」

「やむをえん 核だ」

また中松が核を使おうとした瞬間

『よせつての』

クロと部下達が中松を袋叩きをして止めた。

「気のせいか！？ 今ネコと部下に袋叩きにされたよーな」

(やっぱ 個人で核、所有してるのは、マズいよな)

そう思う部下達であった

「おい クロ どこ行ってたんだ」

「ちょっとな」

ミーくんが駆け寄った。

「こっち来て、テレビ見てみるよ」

「テレビ？ さんまやめてから、「金曜いいとも」は見てねーぞ！」

クロとミーくんは電気屋のテレビを見た

《へりからの中継です。 今朝発見された謎の飛行物体は現在石狩湾上空を移動中です。》

テレビでオーサムの子、コサムが映し出された。

「なんだ？ありや」

クロは不思議そうに見た。

「コサムだよ あの大ロボの息子、コサムを探して、オーサムは暴れているのさ」

「お前ら、何がしくて、そんなもん造ったんだ？」

クロは何故と言うように、ミーくんを睨んだ。

「とにかく、このままじゃ、街がもたないし、核ミサイルが降ってくるかもしれん、オーサムにコサムがここにいないことを伝えよう」

クロとミーくんはまたオーサムの所に向かった。

「伝えるってどーやって」

「お前がなんとかしろ」

ミーくんはオーサムの顔の所までついた

「は・・・ハア~~~~イ？」

「何がハア~~~~イ？」だよ

ミーくんは挨拶をした

サツサツ

ミーくんは妙なことをやった。

「えーと?・・・あなたのムスコは・・・いいインド
の」

「おい インドって何だ!」

クロはインドのことは知らないらしい

「え？ ちがう インドじゃない。」

ミーくんのジエスチャーで何となくわかった。

「おいとい…………て」

ドドドドドド

オーサムは突然、煙を出し、クロ達は吹っ飛んだ。

『わーっ』

クロ達は真つ逆様に落ちると思ったが

ガシッ

一夏はミーくんを受け止め、クロはセシリアが受け止めた。

「大丈夫か、二人とも」

「なんとかな」

ク口達は無事だった。

シャキーン

ドシーン

「飛ぶ気だっ！」

オーサムは翼を出し、倒れて飛んで行った。

「海に向かってるぞ」

「やったぜ オレのジエスチャーが伝わったんだ！」

伝わったのかと一夏達は思った。

「ハハハ インド洋に向かわなきゃいいがな」

「大丈夫ですよーだ」

クロは大笑いし、ミーくんはあっかんべえをした。

「ちょっと待てー！！剛くんを助けるんだろお！？」

ミーくんを剛のことも助けなきゃいけないことを忘れていた。

「あーっ どうしよう空 飛んじまったよ〜〜」

「おまえら、下に下ろしてくれ」

「おっ」

ー夏達はクロ達を下まで下ろした。

「よお ミーくん、まだあの機能備わってるのか？」

クロはオモチャ屋のガラスのオモチャを見ながら言った

「それってラジコン・ヘリか？」

「夏はラジコン・ヘリを見ながら言った

「まさか・・・これで飛ぶ気なの」

「うん　オイラのISのエネルギーはもう切れちゃったしな」

クロ達のISはさっきの戦いで全部、切れてしまったのだ。

「ひ・・・非常時の盗みは重罪なんだぞ」

「いーの　いーの　ネコに罪はないから」

早速ミーくんはアームを出した

「おお　スゲー」

「ミーさんにこんな力があつたなんて」

ミーくんが改造してる時、クロはインターチャネルでIS学園のモ

二ター室までつけた。

「おい！ 千冬 千冬」

「なんだ？ クロ」

「あのロボは子供ロボを探してるんだよロボは石狩湾上空にいるらしいぜ」

クロは千冬にロボの目的を説明した。

「なるほど、ではもうISが使えないお前はどっやってそこに行く気だ？」

「へっ 大丈夫だ。今オイラの連れが飛行形態に改造中だ」

「飛行形態？」

クロの言った言葉に千冬はキョトンとした。

「クロー待たせたな」

「おーカッコいい」

ミーちゃんとラジコン・へりの合体形態

「今はこれが精一杯だぜ？」

「上等」

クロはコックピットに乗った

「テイクオフ」

クロとミーくんは、石狩湾上空まで飛んで行った

「オレ達も行くぞ」

「ええ」

「うん」

「夏達もクロ達と同じように石狩湾まで飛んだ」

石狩湾上空

「コサムー コサムハドコオー!？」

上空でもオーサムはコサムを探していた。

「追いついた。」

クロ達はオーサム所に追いついた。

「おい 剛、生きてるか？ ワハハハ」

「笑い事じゃないだろ」

「剛く〜ん」

剛はぐったりしながらもオーサムのコックピットにいた。

だが

ドカッ

「わあっ！」

オーサムの頭から爆発した。

「みてください。」

「あれは！？」

「航空自衛隊！？」

航空自衛隊がオーサムにミサイルを発射したのだ。

「全機 ミサイル発射！」

隊長、中松兄が指示した。

全機 ミサイルがオーサムに発射された。

「隊長！ 敵の高度が落ちてます」

「トドメだ 核メガトンミサイル発射！」

中松兄は核を発射しようとした瞬間

「コラ！」

ドカーーン

クロのガトリングが中松兄の戦闘機に炸裂した。

「あゝビックリした 今ネコに叱られる夢見ちゃった」

そう言う中松兄であった。

「うゝん さすがの剛もこれでオタブツだな」

「剛くゝゝん」

次の瞬間、ミサイルがクロ達に襲いかかった。

「今度はオイラ達が狙われてるぞ どうする」

「よっ よっ」

航空自衛隊がクロ達を狙おうとするが、ミーくんは

「よくも剛くんを――！！」

「わーっ 早まるな――！！」

ミーくんの暴走で戦闘機をはかした。

さらに

シュルル―

アームが戦闘機の破片をへりにくっつけ最強の戦闘機になった

「やったるでー！！」

「おっ 落ち着け、ミーくん！」

ミーくんはクロの言うことを聞かず、ロケットランチャーを発射した。

ドカン ドカン ドカン ドカン ドカン

あっという間に戦闘機は木っ端微塵になった。

「あわわ・・・」

「うわぁー」

クロと一夏は啞然とした。

「おいっ！ ミーくんあれを見る」

「え？」

パラシュートが降ってくる中、プロペラで飛んでいるロボがいた

「コサムー!!」

ミーくんはコサムの所に向かい

「おーヨシヨシ、こっちおいで、お母さんの所に帰ろーなー」

「プピイ？」

ミーくんはコサムを高く上げて

「ほ〜れ 高い高い」

「プピ プピ」

「もう十分、高いだろ」

コサムは大喜びではしゃいだが

ブリッ

「ひっ！！」

酸を出したのだ

「何しやがる!! このクソガキ!!」

ゴン

ミーくんは怒り、コサムを殴った。

ダパーーン

「何やってんのよ!? バカー」

「あ・・・つい」

鈴はミーくんを叱り、ミーくんは少し反省した

「コサムウ」

『わあー!!』

全身に燃えているオーサムがコサムの所まで向かった。

「かわいそーに 探し回ってるじゃねーかよ」

《爆発まで後三分・・・》

「なんかアナウンスが流れてるぞ」

「忘れてた自爆装置だ！」

ミーくんは剛とコサムのことを考えてたねで自爆装置のことは忘れていたのだ。

「なら、ほっとこーぜ？ 剛は死んじまったし、海の上だから被害もないし・・・」

ミーくんはコックピットから出てきた

「クロ・・・こんなとこまでつきあわせて、悪かったな」

「なんだよ 急に！」

ミーくんは苦笑いしながら言った。

「オレさあ、 剛くん救えなかったから、せめてもの罪ほろぼしにあの親子だけは救ってやるうと思っんだ」

「救うってどうやって！」

「さっき思いついたんだけど、 自爆装置だけをオレの中に取り込むのさ」

「それじゃ、 お前が木っ端微塵に「それとありがとな クロ」

「ハッ？」

クロは啞然した。

「あん時、 オレをかばってくれて」

「別に・・・あれはお前のためについてあっ！」

ミークンはオーサムを救うべく、 向かった。

「コサム〜」

「プピイ」

オーサムはコサムと出会い、涙のようなものを流した。

ミーくんはオーサムの所に着いた。

「たしか、そこに、ハッチが・・・」

ミーくんは内部の爆弾を探しに行った

《爆発まであと一分・・・》

「急げ 急げ」

ミーくんは内部の所を探し回った結果

「これだ！」

爆弾があった。

一方クロちゃんは

「チエツ 一人でいいかつこしやがってミーくんの奴」

ガス ガス

「ハ〜〜イ 燃料ぎれでーす」

燃料が切れて戦闘機は墜落した。

「おい クロ」

デカイ船が現れ、そこに立ってたのは、

「よお 千冬」

千冬だった。IS学園用の船がここに現れたのだ。

「なにしてる？ 海のと真ん中で」

千冬は仁王立ちで行った

「あん！？」

クロは唾然とした、何故、剛がこの船にいたことが

「テメエーなにやっとなんじゃ、こんなとこで」

クロは上がりながら質問した。

「自衛隊のミサイル攻撃を喰らったときロックピットごと海に落ちたのだ」

剛は魚を食べながら言った。

「この近くに漂流しててな。なんか衰弱してたぞ」

「呆れて 殴る気にもならんわ」

ク口はため息をしている時、一夏達が降りてきた、

「ここに来てたのか千冬姉」

「織斑先生だ！ バカモノ」

「は はい」

一夏は千冬にギロリと睨まれた

一方、ミーくんは

《爆発まであと二十秒》

サパアアアン

ミーくんが爆弾を抱えて出てきた。

「よし爆弾取り外し成功！ あとはできるだけ遠くに……」

《9》

《8》

《7》

ミークンは全速力で行ったが

《6》

《5》

「コレ オマチ ボーヤ」

オーサムがミークンを片手で持った。

「わーっ！！ ゴメンナサイ ゴメンナサイ」

ミークンは暴れるが

「イケナイ ボーヤダ」

「へ？」

ミークンの体から爆弾を取り外し、

「イノチヲソマツにシテ」

オーサムは爆弾を遠くに投げた。

ボカアアン

大爆発した。

「ワタシハ コサムトイツシヨニウミノ ソコデ クラシテイキマ
ス サヨナラヤサシイ ネコノ ボーヤ」

そう言い残し、二人は海に潜った。

「よかったじゃねーか お前の望みどおりになってよ」

「クロ!？」

千冬達の船がやってきた。

「ああつ 剛くんも!生きてたんだねっ!」

「ごめんよミーくん心配かけちゃって」

「いいんだよ 剛くーん!!」

二人はひしつと抱き合った。

「さーとと……」

「一件落着ーってか」

と思ったが

「イヤ 殴る!!」

ボカン

「ぐええー」

そういうオチになった。

その日の夕方

「クロー 見てみる 大物が釣れたぞー!!」

ジーさん達が帰ってきた。その大物は

「異国の魚じゃ」

「プピイ」

コサムだった。

「
だは!!!?」

クロはずっこけた

「
コサム ドコォー」

ズシーン ズシーン

オーサムはコサムを探すため、街の中を探し回った。

この先は待て次回!!

空飛ぶ親子ロボ（後書き）

次はミーくんの初恋です。鈴とセシリアがミーくんの恋を応援します。

ミークんの初恋 前編（前書き）

久々のクロちゃんの投稿です。

ミーくんの初恋 前編

よっ俺、猫のミーくん みるからにサイボーグなんだ。

最近、なんだか心が痛む。どこかおかしくなったらしい。

「ハア」

ジー

ミーくんはため息をつき、それを双眼鏡でミーくんを見る。ミーくんの親友 剛

「オーーーーーッス！」

「ぎゃあーっ!!！」

クロが現れ、剛を踏みつけながら挨拶した。

「なっ・・・なんだキサマ!! いきなり!!」

「声がちっさい！ オーーーーーッス!!！」

剛はクロを怒鳴ろうとしたクロは容赦なく、剛を踏みつけた。

「オース」

剛はようやく小さな声でクロに挨拶を交わし、クロは踏みつけるのを止めた。

「テメー　またろくでもねえことたくらんでたな？」

クロは双眼鏡を取って、剛が見たところを見た。

「ん？」

ミーくんが体育座りしながらため息をついた。

「この二・三日、ミーくんのおかしいんだ？」

「おなかすいてんじゃねーの？」

クロはどうでもよさそうに呟いた。

「たのむっ！クロ！それとなくミーくんに聞いてみてくれ！」

剛はクロの目の前で土下座しながら頼んだ。

「ほーらきた　なんか最近オイラを便利屋だと思ってねーか？」

――――

一方、ミーくんは

「ハア」

空を見上げ、ため息をつきながら歩いていた。

ガアン

「よお元気ねーじゃねーか？」

クロはガトリングでミーくんの片方の耳を破壊して、言った。

「や・・・やあクロちゃん 元気だった？」

「！...」

どうやら、耳を壊して悪化したらしい。

「お前 ホントにおかしいぞ！ しっかりしろ！ ホレ！ 耳をつけて！」

クロはミーくんの耳を応急処置で接着剤でくっつけた。

「オイ！ こつち見ろ！ オイラにすべて話せ 悩み事は今、解決した方が楽だぜ！！」

ミーくんはクロがこんなに真剣に話を聞いてくれることはおかしいと思ったが、ここはひとまず答えるべきだと思った。

「うつつクロ〜〜聞いてくれー！」

「んがー」

ミーくんは涙を出しながら、クロに飛びついた。

5分後

「んなにー！ー！？初恋だー！？」

「大きな声で言うなよ ハズカシイ」

クロはミーくんの衝撃な発言に絶叫し、ミーくんは顔を赤くしながら、顔を隠した。

「あ・・・あれはー三日前の夜だった・・・」

「ハーッコーイーと」

ミーくんが説明しているとクロはミーくんの顔に落書きした。

俺が一人で公園を散歩してたとき

「クウーン クウーン」

犬の鳴き声が聞こえていたので、俺は草むらに隠れて、様子をうかがった。

「はやく しろよー」

「わかってるわよ それじゃ、じゃーね〜」

どうやらワザワザ遠くから犬を捨てに来たらしい。ブチ切れた俺は・
・・・

「オラー！！ 忘れもんだー！！」

IS ランスロットを発動し、車を一刀両断に切り裂き、元飼い主は彼氏と一緒に吹っ飛んだってことだ。

そしてもう一度、公園に行ってみると・・・彼女が野犬におそわれてたんだ。

野犬は容赦なく、彼女に噛み付こうとしたが、

「ギャヒン?!」

「こいつがわかるか? チンピラ共」

俺はブレイブランチャーで野犬を追い払った。

彼女は俺を見て、怯えていたが

「動くな！」

俺は彼女の鎖を壊し、自由の身にした。

「一つだけいっておくぞ 元の飼い主の所へ帰ろうなんて馬鹿なこととは考えるな それくらいなら、ここで、野垂れ死ね」

それを言い残して、俺の後ろに警察と消防車が現れたから、オイラは逃げた。

――

「ヒューーーーーーやるじゃん」

クロはその話を聞いて、ミーくんをからかい、ミーくんは照れた。

「だけど、ムリムリ諦めな」

「えっ」

「だいたいなさけねーと思わねーか？ 猫が犬に惚れるなんてよお世も末だぜ」

「あああ それは言わないで〜」

クロの言ったことに

ミーくんはすこし、傷つけた感じだったが、クロに言われ続けるとなぜか赤くなつて寝転がっていた。

「おもちゃ屋さん？」

「おう いい店があんだよ」

クロは周りを伺いながら、進んだ。

「見る よりどりみどりだぞ」

「ワッオ スツゲー」

クロがミーくんに紹介した店は前にクロがサイボーグ丸出したった時に見つけたUFOキャッチャーだった。

「へえーなんか不思議な空間だな」

「オイラは前に一度やってるからなー」

初めてUFOキャッチャーの中に入ったミーくんは周りを見ながら思った。

「それでリクエストはどんなのにするんだ？」

「そつだな 彼女にあわせてイケメンな犬がいいな」

「お前 猫のプライド吹っ飛んでるぞ」

ミーくんはニヤニヤしながら注文し、クローは少しため息をついた。

「えーっと そうですね それでしたらお客様にはこれなんかよろしいかと」

出したのはスヌー ーだった。

「大丈夫か？」

ミーくんはそれを出してこの小説に著作権は大丈夫か不安だった。

「例えば、これなんか今の若い人にブームですよ」

「えっどれどれ」

ジィー

「ちょっと可愛すぎるよ 店員さん」

「いやいや 大丈夫ですよ お客様 わあ 似合っ 似合っ」

ジィー

『見せもんじゃねーぞコラー!!!?!?』

「キャアアア!?!?」

クロとミーくんがキャッチャーの中で盛り上がったる所を店員が目撃して、クロとミーくんはガラスにへばりついて、店員に一喝した。

「何事だ!？」

「やべつ店長だ!？」

クロは店長が現れて、もう駄目だと思ったが

「オラーテメーはさつさと寝てるー!!」

ミーくんの魂心の一撃で店長をKOした。

ミーくんは店長の持っていたぬいぐるみを奪って一目散に走った。

「バーカ バーカ なめんじゃねーぞ 糞爺ひゃっほーい!」

「てめーそりゃ 強盗だ 強盗!」

クロも一目散に走った。

「鈴さん……今のは」

「クロとミーよね」

二匹が店長をぶん殴った所を見ていたのはセシリアと鈴だった。

「はあ はあ てめー店長にあの言葉はねーだろ」

「ごめん つい」

ミーくんは魔が差したことにうつむいた。

「まあ ぬいぐるみも手に入れたし、これで作戦に移すぞ」

「なんの作戦？」

『！？』

クロとミーくんは後ろを振り向き、それをブラックスマイルでにやけるセシリアと鈴が立っていた。

10分後

「ふーん あんたが犬に惚れるなんてねー」

「雄猫の誇りというのものも脆いものですわね」

鈴とセシリアの言葉にミーくんは少し、グサツと刺された感じだっ

た。

「やっぱ……俺ってあの子に告るのやめようかな」

プチッ

「バカいつてんじゃないわよー!!」

ミーくんは諦めようとしたが、鈴はゲンコツでミーくんを殴った。

「何すんだよー」

「好きなんですよ 逢いたいでしょ だったら行って抱きしめてきなさいよ!! あたしはね一夏に告ろうとしたけど、あいつはバカで単純だけど、あたし達の為なら、たとえ火の中、水の中でも助けにきてくれるのよ だからあんたもあの子に告白して、守ってあげらるような男になりなさいよ」

鈴はミーくんに愛の大切を知って、決意を固めた。

それを草むらで聞いていた剛は涙を浮かべた。

「そ……そうだったのか! ミーくん 何故ワシに相談してくれなかった!」

剛は涙を流しながら、走った。

「よし ミーくんの悩み ワシが解決してやる!」

この剛の勘違いからこの事件を起こす引き金となった。

ミーくんは犬のぬいぐるみを着たが、緊張して震えていた。

「じゃあ アタシ達はここで帰るから、しっかりやりなさいよ」

「頑張ってください応援してますわ!」

鈴達は去って、ミーくんは彼女のいる古びた工場に行った。

(あれ・・・すこし痩せたんじゃないかな?)

彼女は最近、食べ物を取るの少なく、身体がすこし痩せて、この廃工場で暮らしているのだった。

(えーっと自然にさりげなく『通りすがりのワンちゃん』という設

定だったな　せーの)

ヘッロー　ベイビー？

ミーくんが彼女に見せたのは悪魔のようで犬とは思えない顔だった。

バキ　ガァン

クロは跳び蹴りで、鈴は双天牙月を出して叩いた。

「なんか　違った？」

「あんなねー今の顔今日の夜にできそうじゃないの！」

鈴は拳を握り締めながら、言った。

「おい！　まだきづかれてないぞ」

クロは彼女をうかがったが安心して眠ってた。

「じゃあ　今度はプレゼント作戦よ　これ持って行きなさい！」

渡さされたのはリボン付きの肉だった。

「た・・・食べなよ」

？

ミーくんは緊張しながら肉を渡して、彼女はキョトンとした。

「あ・・・怪しいもんじゃないよ 僕通りすがりのシャイなワンちゃんだからさ」

(犬の体育座りですでに怪しいわよ)

「ありがとう ずっと何も食べてなかったの」

彼女は心を開いたようにしゃべった。

「私 リリイっていうの アナタは」

「ぼ・・・僕ミーくん」

「ウフツ 猫ちゃんみたいな名前ね」

「よく言われるんだ。」

鈴達はミーちゃんとリリイが話していることはわかりません。

「どっちら上手くいったわね」

「そうですね」

「うしし　へますんなよ　ミーくん」

クロは先にミーちゃんと鈴達と離れた。

「おーい剛ーミーくんの悩みは解決したぞー」

クロはゴミ捨て場で剛に知らせようとしたが、

「わーっ！ー！」

クスッ

クロが見たのは体にラブと書いていて、顔は不気味にブスだった。

「ふふふ どうだクロ ワシがミーくんのために作り上げた犬型ロボット名付けて初恋ロボ「ヒロスエ」」~~~~~!!」

剛はミーくんのために解決策を考え出したのはこのヒロスエだった。

「従順でおしとやか男のために全てを捧げる女の鑑のような雌犬だ
ちよつと試してみる」

「田嶋 ーコが怒りそうなフレーズだな」

クロはヒロスエに向かって、お手をしたが

「お手」

踏みつけ

「お手」

食べられ

「お手」

拳げ句の果てにウンコされ

「スクラァァァップ」

ぶちぎれてガトリングで粉碎した。

「なにすんだよ〜ミーくんのために作ったのにい」

「ムカつくんだよ お前の造るものって」

一時間後

「よし パワーアップしたぞ 早速 「ミーくんラブラブ作戦」開始だ」

「いやだからさ、それはもう解決したから……いや まてよ」

クロは止めようとしたが

「なんか面白そうだな」

クロはブラックスマイルを浮かびながら言った。

『発進!』

この後、ミーくんはリリィに告白できるか、ミーくんの運命は
ま
て後編!!

ミークンの初恋 前編（後書き）

次の次にロミオの話です。ではまた

ミイくんの初恋 後編(前書き)

書きました。

ミーくんの初恋 後編

ミーくんとリイは工場を出て、広い公園で休んでいた。当然鈴とセシリアもミーくん達の後ろのベンチで監視していた。

「私ねペットショップで生まれたの。かなり大きくなってから買われていったけどすぐに捨てられちゃった。」

「……………」

リイは自分の過去を話し、それを聞いているミーくんは黙って聞いた。

「あいつら、一体、何話してるのかしら」

「もしかして、恋愛の話でしたら！？ キャー！！！」

鈴は公園に行く前にコンビニでサンドイッチを食べながら監視し、セシリアは勝手に二人のことを妄想しながら、大声を出した。

「私もミーくんみたいに野良に生まれればよかった。そして自分の力で何かをするの」

「おっ 教えてあげるよ！！ 僕が全部！ ゴハンの探し方も喧嘩の仕方も！」

「あつ 馬鹿!?!」

鈴がミーくんが勢いに立ってしまい、鈴は止めようとしたんだけど、

「すごいわー ミーくん 二本足でも立てるのね」

「あ……うん……まあね」

ミーくんが二本足で立っていても彼女にはバレなかったらしい。

それを見た鈴とセシリアはほっとため息をついた。

「そんなことよりさ、早速 今夜のゴハンを探しに行こうよ」

ミーくんは張り切って、リリィと一緒に行くとしたが、突然、謎の物体がこちらに迫ってきた。

「ミ〜〜クウ〜〜ん!! 愛してるわ〜〜!!」

「わああああ なんじゃ ありゃー!?!」

「?」

「何よ あのブサイクなのは」

「美しさの欠片もないですわね」

ヒロスエが現れ、ミーくんは驚愕した。ヒロスエはミーくんを口で捕まえ、振り回した。

「おい　なんか　間違っつてねーか？」

「愛情モードのレベルを上げすぎたかな？」

草村で隠れているクロと剛はヒロスエの性能を見て異常と思っていた。

「ミーくん!!！」

リリイは叫んだ。

「リ・・・リリイ　よく見てるんだよ　喧嘩というのは　「じゃつて」

ミーくんは素早く、ヒロスエの口が離れて

「打つべし!!！」

「打つべし!!！」

「打つべし!!！」

パンチのラッシュでヒロスエを圧倒した。

「打つべし!!！」

最後に少しだけ、ISを発動し、ブレイブランチャーで、ヒロスエに炸裂した。

「大丈夫？ ミーくん あの方 お友達？」

「僕にとっては初対面です!!」

ミーくんは即答で答えた。

「やったわね〜 ミーくん」

ヒロスエは前足を無くしても、立ち上がった。

「ミー ここはアタシ達に任せて、アンタは先に逃げて」

「ここは私たちが足止めしておきますので、その間、どこか遠いところに逃げてくださいまし」

「鈴ちゃん セシリア」

鈴とセシリアはISを発動して、ミーくとリリィは指示に従って逃げた。

「もぉーっ！ バカーン こんなに愛してるのにー」

ヒロスエは起き上がり、ミーくんを追うと走ろうとしたが、

「くらえー！！」

鈴の龍砲を炸裂したが

「そんなのきかないわよー」

「だったらこれはどうですか？」

セシリアはピットでヒロスエの周りを囲み、最後にライフルで打ちのめしたが

「だからー きかないわよー」

『うそー！ー！！』

ヒロスエの頑丈な装甲に鈴とセシリアは絶叫した。

「なあ ヒロスエのボディってどうなってたんだ」

「あれは、ワシが試作として作った。ISの攻撃を防ぐ特殊なシールドを使っているんだ」

「お前、初恋ロボにシールドって必要あるか？」

「いやー万が一の時にね」

クロは呆れた顔で話し、剛は汗をかきながら、説明をした。

「そついや、よくあの特殊なシールド作ったな」

「まあー ワシはあそこで研究員の一人だったからな」

剛は自慢話で、高笑いをしだした。

「んっ」

高笑いの音でミーくんは草村を見て

「あっ」

『!?!?』

ミーくんはミーちゃんと剛くんを見つけた。

「丁度 よかった。クローあの化けもん、どうにかしてくれー」

「わ〜〜 バカー!!」

ミーくん達はクロのところに行こうとしたが、クロは拒否しよじとしましたが、

「えい 初恋汁!」

ヒロスエの口から、硫酸が吐き出された。

「あぶないーい！！ 硫酸だー！！！」

「初恋ロボなのに なんでー」

ミーくんはリリイをかばってぬいぐるみに硫酸がついて

「やべっ！？」

ぬいぐるみはだんだん溶けていった。

「あっ あなたは」

「えっ！？」

リリイはミーくんの正体を見て驚いた。

「あの夜 私を助けてくれた猫さん！？」

リリイは記憶でミーくんの姿が映し出すと思ったが

「いやー 礼には及ばんよリリイ オイラ クロってんだ」

「えっ？」

「僕だよー リリィー!!!」

クロにぶち壊された。

「うおお 殺してやるー!!!」

ミーくんは土管を持ち上げてクロを潰そうとした。

「バカ バカ かるいジョーダンだろ」

ミーくとクロのバカコントをしてる内にヒロスエが迫っていた。

「コラア ミーくん」

ヒロスエはキャタピラモードでミーくに迫ってきた。

「あのバケモン 特殊なシールドを持つてるらしいぜ」

「えーー うそーーー!!!」

ミーくんは驚愕した。

「だが、オイラ達力なら、あのバケモンを倒せるはずだ」

「よし っつなりゃ」

クロとミーくんは一斉に上空に飛び跳ねて腕と腕にクロスを作った。

『合体！！』

クロとミーくんが合体した装備は、超大型ナパーム弾を装備し、左目には特殊スコープがつけられたら。

『かかってこい！ブスガエル！！』

「あ〜ん ひど〜い ブスはいいけどカエルはゆるさな〜い！」

ヒロスエは泣きながら、クロ達に襲いかかってきた。

『ブスはいいのかよ！！ くらえ〜っ！』

クロ達は大型ナパーム弾を一斉に射撃した。

「愛は無敵よ〜っ！」

ヒロスエも大型アームで掴もうとしたが、威力でぶっ飛ばされ、道路の所に落下した。

『あぶな〜い！』

横断歩道を渡ってる女性がヒロスエの落下で、他の車は激突しあい、ぶつかると思ったが

リリイが道路の所に跳び、女の子をくわえて、なんとか、命は取り留めた。

『里子ー！ー！』

女の子の父親と母親が現れた。

「ひえーっー一般市民を巻き込んだよ！」

「チツ 何を今更、オイラ達が今までぶっ壊してきたもんを考えてみるよ」

ミーくんは慌て、クロは体を横になって、言い切った。

「そろそろ本気だそっかなあ」

『うそー！ー！ー！』

ヒロスエは不気味な笑みで、クロ達はもう駄目だと思ったが、

「スイッチオフ！」

剛が起動スイッチをオフにしてヒロスエは停止した。

「うゝむ 失敗だったか 初恋ロボ」

「バカやろう！ お前の発明の中で一番強いじゃねーか！ 初恋ロボ」

クロと剛は鈴とセシリアに事情を聞いて、こっぴどく叱られ、リリイは里子ちゃんの家で飼われることになった。

「リリイは優しい飼い主のもとで暮らすのが一番幸せだよ」

ミーくんは穏やかに言った。

「でも やっぱり 私 ミーくんと一緒にの方が・・・」

「心配すんなって 地球の果てにいたって会いに行つてやるぜ ベイビー」

ミーくんはカッコつけながら、リリイと別れた。

「約束ね ミーくん・・・！」

リリイは車に乗り、まるで、塵気楼のように消えていった。ミーく

んはバイバイしながら、笑って見送った。

「もう いいぞ」

「うっ うっ うおおおおん びえええん」

ミーくんは道路にしがみついて泣いた。

こうして、ミーくんの初恋は幕を閉じた。

IS学園 食堂では

生徒たちはなにか騒いでいた。

「どつしたんだ？」

「夏は質問をした。」

「織斑くん 聞いて！今日ね新しい食堂員が来たの」

「食堂員？」

クロはキョトンとした。

「その食堂員が猫型ロボット」

「可愛くて」

「栄養も考えてくれる 素敵なお猫なのー」

「まさか!?!」

女子達が浮かれている時、

「はい お待たせー」

「きゃあー!?!」

「ミーくん!?!」

ミーくんがIS学園にいるのだった。

「なんで お前がここにいるんだよー!!」

クロはミーくんを指を差しながら言った。

「剛くんのご飯を作るためにここで働いてんだ！ お前なんか食べ残しの奴でも食っとけ!!」

「なにー!!」

クロとミーくんの喧嘩が始まり、IS学園は賑やかであった。

一方、千冬は

「クロネコ また 大暴れ 事故勃発」

新聞でクロがやらかしたことが書かれており、千冬は溜め息をついた時、

ブルルル ブルルル

携帯の着信音がなり、千冬は電話に出た。

「もしもし」

「はい はい ちーちゃん ちーちゃん 元気ー！！ 元気ー！！」

「・・・束か」

千冬は頭を抱えながら言った。今電話で話しているのは、世界で唯一ISを発明した人物で篤の姉の篠之ノ 束であった。

「何の用だ」

「ちーちゃんのところにはクロネコのクロちゃんと猫型のミーくんがいるよねー？」

「そこまで知っているのか？」

千冬は呆れて言った。

「実は、クロちゃんのISジェフティそしてゼロシステムは人類の未来を救うあるいは世界の滅亡の鍵を握ってるISらしいよ」

「なんだとっ！」

一回！！
一体クロちゃんのISにはどんな意味がそれはまたIS編でまた次

ミークんの初恋 後編（後書き）

今回はロミオ編で出演者は一夏と籌が出てきます。

ミイくん・篝誘拐事件 前編（前書き）

南極編 前編始まります。

ミーくん・箒誘拐事件 前編

とあるゴミ置き場でミーくんはいつものどおりにも剛の「ご飯を作っていた。

「フッフフーン ラ〜ラ〜ラ〜」

ミーくんは鼻歌で楽しそうにお料理をしている時、

「ミーくん」

「あつ 剛くん、もう少し待っててね 今美味しいのが出来上がるからね」

ミーくんは後ろを振り向いた時、

ピシッ

ミーくんの何かがひびが来た。

「だっ だっ だっ 誰だお前はー!!」

そしてミークンは跡形もなく行方不明になった。

そしてもう一人の被害者はIS学園の中にいた。

「ふー 今日もいい朝練だった。」

彼女、篠ノ之 箒は剣道部の部室で日々、一振り 一振りの特訓をしているのである。

（それにしても・・・一夏の奴・・・良く覚えているものだな・・・ハツいかんいかん！！何を考えているんだ。）

箒は頭の中で一夏のことを思い、箒は赤くなったり、首を横に振ったりしていた。

「やあ 箒ちゃん」

「いち・・・」

箒は後ろに一夏の声にそっくりと思い振り向いたのは、

「だっ だっ だっ 誰だ！！ お前はー！！？」

箒は指を差しながら叫んだ。

箒が見たものは体は電柱のように大きく、鼻は大きく、鼻息もしながら、しゃべり、目は横線のようにだった。そして彼が着ているのは、IS学園の男子生徒の制服だった。

「何いつてんだよー僕は一夏だよー」

電柱は鼻息をしながら答えた。

「ば ば バカ者ー！！？ 一夏はそんな風に背は高くないぞー
！！？」

「箒ちゃんが毎日、お稽古をして大きくなったんだよー」

電柱はまた鼻息をしながら答えた。

「貴様・・・一夏をどこへやった！？」

箒は用意周到に竹刀を構えながら言った。

「ねー箒ちゃん 僕のことを一夏って呼んでよ！！ そしたら・・・
教えてあ・げ・る」

電柱は赤らめながら答えた。よっぽど、一夏って言われたらしい。

「本当だな？ 貴様嘘をついたら、ただじゃすまないからな」

箒は額から血管が浮かび上がり、竹刀を握り締めて言った。

「嘘なんかつくもんかーだって僕は一夏なんだみよーん」

「何から何まで違つぞー!?!?」

箒はますます血管が浮かびながら、名前を呼んだ。

「い・い・いちか」

「えー!! 聞こえないよー?」

「一夏ー!?!?!?!?!」

箒は額の血管を抑えながら叫んだ。

「はーい、箒ちゃんやつとわかったのかい？馬鹿だなー箒ちゃん
は箒ちゃんはバカだ」

カチン

箒は馬鹿と言われて、カチンとしたが、我慢した。もし本物がいつたら、死亡確定である。

「……教える!!!」

「えつと〜ここに来た理由は〜てゆーか……教えない!!」

生意気に答えようとしたが、教えなかった。それを聞いた箒はとうとう堪忍袋の尾が切れた

「貴様〜 もう許さん!!! 天誅!!!!!!」

箒は勢いよく飛び上がって、木刀の一刀両断を炸裂させようとした。

翌日

「おーい クロ〜」

(今・・昼寝中)

クロは家でひなたぼっこをして昼寝してる最中、ジーさんがクロを呼んでいた。クロはジーさんのことを無視して昼寝をした時、

「この二人 知り合いかえ？」

「フーッ!?!?」

ジーさんが引きずっているのは、鼻血を出している剛と裸のままのびている一夏であった。

5分後

一夏はジーさんに頼んで、ジーさんの若い頃の服を貸してあげた。

「あー何年ぶりだろうか こんな人間らしいひとときは」

「はあー落ち着くな〜女子達がない生活は久しぶりだなー」

剛と一夏は一人ずつ感想を述べていった。

「そんなことより、なんでお前らがうちの玄関先でのびてたんんだよ？」

クロは体を丸くして質問した。

「わからんのだ。二・三日前、突然誰かに後ろから殴られて、気がついたらここに運ばれていた」

「俺も一昨日の朝にシャワーを浴び終わった時、突然、体が痺れて、気がついたら、ここに」

剛と一夏は同時に溜め息をついた。

「ミーくんはどうしたんだよ？ いつも一緒だろ？」

ビュン

ゴキン

突然、緑色の物体が剛の頭にクリティカルヒットした。

「こ……これは

ミーくんの足!？」

「この布……まさか箒のリボン!？」

クロは何か音がして近づいたら、猛ダッシュして逃げた。クロ達もそれを追った。

「げー電柱が走ってるー!」

なんと体型は電柱のように長い大男であった。電柱は角を曲がって、クロ達も角を曲がるうとしたが、

「はっ！」

角を曲がった時、クロ達は電柱は電柱のフリをしていたのだ。

「あ……あれはワシらの目を欺こうとしているのか？」

「いやあからさまに挑発しているのかもしれない」

「とにかく撃ってみようぜ」

「ために」

クロはガトリングで電柱を撃ったが、

「うっ 涙流してこらえてるっ」

「おいおい」

「くそっただのアホか」

電柱は涙を流しながら、耐えていた。

「おいってめーの目的はなんだ！」

クロは電柱に質問したが

「……」

黙った

「バレてるっつーの」

クロは電柱の足を掴んで、地面に叩きつけた。

「やつやめたまえ！ 人質がどうなってもいいのかつ！」

電柱は気を取り締めて、クロ達に人質のことをしゃべったが

「人質がどうしたって？」

クロは鼻を回し、電柱は痛がっていた。

「おい ミーくんはどこだっ言わないと逆回転だぞ！！」

電柱は腹の服を開けて、見たものはバラバラになったミーくんがいた。

「なんてことしゃがる」

「ネコのホルマリン付けかよ！？ハッハッハ」

剛は絶叫し、クロは呵々大笑した。

「おい 箒は 箒はどこにいるんだ？」

電柱は服の中からカプセルのような物を取り出して、クロ達は覗き込んで見たものは液状の中で眠っている箒だった。

「箒!!!??」

一夏は叫んでも箒には通じなかった。

「人質を返して欲しければ南極にこい」

『うわっ』

電柱は足をひっくるめてロケットにチェンジして飛んだが

ガスっ

『えっ!?!?』

電柱は墜落したと思っただが、

『ほっ』

飛んだ

「くそう 行ってしまった」

「アイツ南極まで持つのか？」

剛は悔しがり、クロは不安そうに呟いた。

「よしっさっそく南極へ向かう準備だ！」

剛は家に戻って、支度をしようとしたが、

「おい どこ行くクロ！」

「どっつて帰って昼寝の続きだ」

「その後で南極に行くんだろ？ な？ ね？」

「馬鹿か お前 猫は寒いところはダメなんだよ」

「やだい やだい クロちゃん一緒に行ってくれなきゃやだーい！
」！

「一生やってる」

剛は駄々っ子のようにクロにお願いしたがクロはトボトボ帰ろうとした時、

「クロ!!」

『!?!』

一夏の一声でクロと剛は止まった。

「お願いだ・俺の幼なじみの筈を・俺達と一緒に助けに行ってくれ!!」

「一夏くん」

「・・・頼むクロ・お願いだ・お前の力が必要なんだ」

一夏は頭を下げた頼んだ。

それを見たクロは

「・・・・・・・・・・・・・・・・しょうがねーな」

「クロ!!」

クロは溜め息をついて決心した。

「一緒に行ってくれるのか」

「今回だけだからな」

クロは後ろを見て、言った。

「も〜クロちゃ〜んも〜 照れ屋なんだから」

剛はクロのほっぺをツンツンしてからかったがクロの右ストレートでノックアウトされた。

2時間後

「よし、できた「フライング・ヒロスエ」」

剛は得意げに言った。クロと一夏はただトナカイの角と羽をつけただけじゃないのかと思っていた。

「飛べるのか？」

クロは不安そうに質問した。

「何を言うっ！！ ワシの技術にかかればこんなのちよちよいのちよ
いじゃ」

剛は呵々大笑をしようとしたが、なぜか絶叫した。

『どづした!?!』

クロと一夏はユニゾンで言った。

「おやつと弁当を買いに忘れていた。お前達、行くぞ」

ズコッ

クロと一夏はずっこけた。それ必要か!?!と感じた一人と一匹だった。

1時間後

「よし おやつ 弁当 水筒、テント、寝間着、カイロすべて持ったな よーしヒロスエGo!!!」

剛のかけ声でヒロスエは走り、そして華麗に飛び上がった。

「・・・まあこうなるわな」

クロが思ったたのはヒロスエ自身は飛び、ソリ自身に飛行装置は付いていないのだ。荷物はボトボトと落ちていった。

「ははは クロちゃん悪いけど、ISで荷物全部回収して」

「たくっ面倒くせーな」

クロはISジェフティを発動して荷物を回収した。

「まあ もし生きて南極に着いたら、会おうぜ」

「なんか・・・自信ないな」ははは

こうしてクロ 剛 一夏のミーくん 篝の救出に向かったこの続き
は待て!!! 後半!!!

ミーくん・箒誘拐事件 前編（後書き）

ロミオのコスプレ、のほほんさんはまだ出て来てないけど、のほほんさんはクロちゃんのギャグ編の話の間に出そうと考えてます。

ミイくん・箒誘拐事件後編（前書き）

ミイくんと箒誘拐事件後編ですどうぞ

ミークン・箒誘拐事件後編

IS学園

「織斑 篠ノ之 朝から見ないが、オルコット知ってるか？」

千冬はSHRで一夏と箒は出席してないことを気にかけていた。

「いえ、私も二人のことはさっぱりですわ」

セシリアは首を横にふりながら答えた。

「全く一体どこに「プルルルル!!」」

突然、千冬の携帯が鳴りだし、教室を出て、携帯を開いた。

「やー！ やー！ ちーちゃん！！ 元氣ー 元氣ー」

「……束か」

千冬は不機嫌そうに言った。

「何の用だ？」

「実はーいっくんと箒ちゃんのことについて話に来ただよーん」

「何……!?!?」

千冬は一夏と筭のことで目が変わった。

「いっくんはクロちゃんと一緒に筭ちゃんを助けに南極にいったんだよー」

「何だと!?!」

東はなぜそんな風に平然と話すのか、そんなことはどうでもいいとして、何故、筭は南極に連れ去ったのか

「東・・・篠ノ之を連れ去った奴は前に出て来た。無人のISと柴犬の関係者か」

「全然違うよ」

即答か!!千冬は突っ込んだ。

「例えて言うなら・・・地球の危機かな」

「地球の危機?」

「あははは、じゃあね」

そっぴい残し、東は電話を切った。

「織斑先生 どうしたんですか？」

真耶は教室を出て、千冬はある決心をした。

「……山田先生 急いで、へりの支度をしろ」

「えっ」

「これから、南極に向かう」

「えーーーーー!!!!!!?」

千冬言葉を聞いて、真耶は絶叫した。

—————

ここは雪と氷に閉ざされた白の世界 南極

ここは地上に残された数少ない秘境の一つでもあるのだ

一方、クロ、一夏、剛は南極に着き、少し休憩して弁当とおやつを食っていた。

チーン

「出来たぞー」

ヒロスエの体の中から暖かい弁当が出て来た。

「いや〜苦勞して作った。電子レンジ機能をつけて正解だったよ」

剛は弁当を食べながら感心した。

「初恋ロボにそんな機能が必要あるのか？」

「とにかく、まあ体力つけて、箒達を助けに行くぞ」

一夏はおやつを食べながら言った。

そしてクロ、一夏、剛はヒロスエのソリに乗って箒達を捜すために南極中を捜しまくった。

「かれこれ二時間・・・走っているが、一体我々はどこへ向かっているのだ？」

剛はヒロスエを走らせながら、言った。

「おっアイツに聞いて見るよ」

クロが指を指したのは、この大陸でボール遊びをしている少年だっ

た。

「お〜い、その君」

剛はボール遊びをしている少年に尋ねた。少年の背中には笠木で書かれていた。それが彼の名前である。

「空飛ぶ電柱知らないか？」

「ああ あれね知ってるよ」

「教えてくれ！」

「う〜〜んいいけど〜〜」

笠木は剛をみてニヤリと笑った。

「その代わりおっちゃんAK の「会いたか」「歌って」

「えっ？」

「振付でね」

「.....」

笠木の要求を聞いた剛はクロを見てダンマリした。

「早くやれよ」

「コホン」

「会いたかったー 会いたかったー 会いたかったーYES!!
君に」

「うわゝ薄着にミニスカ」

「寒そー」

「うまい うまい」

クロと一夏は一つずつ感想を言って、笠木は喜んでいた。

15分後

「じゃあ約束どおりこっちにまっすぐ行けば電柱みたいのが刺さってたよ」

剛は鼻水を垂らしながら、ソリを走らせた。

「気をつけてー」

「おう」

「ありがとうな」

「くそっ 笠木か 覚えておくぞー!」

クロと一夏は笠木にお礼を言ったが剛は笠木に復讐心が芽生えた。

「おっあれか」

クロ達はソリを止め、見たのは確かに氷山の上に突き刺さった電柱であつた

「なんに見える？」

「氷山に突き刺さった電柱」

「もしか巧妙な罠では」

「……」

「……」

「……」

「いや純粹に助けが必要なんだろ？」

クロと一夏は電柱の足にロープをつけてヒロスエにつなげた。

「いいぞ〜ヒロスエちゃん」

ヒロスエは猛ダッシュで走つた時、電柱は抜かれた。

ヒロスエは容赦なく、電柱を引きずりまくつた。冷たい海の中に入られ、氷山の尖った氷に刺され、あるいはシャチに噛まれ、セイウチの牙に刺され、そして最後に氷山の壁にクリティカルヒットに炸

「おめーが地球人っていうのが驚く」

「地球人があんなロケットのように飛ばねーよ」

「ミーくんを返せ！！」

30分後

「まあいいや、面白そうだし付き合っただるよ」

「終わったら、箒達を解放しろよ」

「は・・・はい」

剛はソリを引かせてヒロスエを走らせた。

「千年前 この星に南極に不時着して以来、我々の宇宙船は氷の下に埋もれたままなのです。かろうじて私一人が氷の下から脱出して助けを呼ぶために日本へ行きました。」

電柱は涙を流しながら説明した。

「お願いです。宇宙船がないと自分たちの星へ帰れません。宇宙船を引き上げて下さい」

「なんでオイラ達に頼むんだよ？」

「一夏さんのことはこの世界で唯一ISが使える男性だと聞いて、

もつとも強力的な存在だと判断したからです。そしてクロちゃんの方は情報は少なくスマートフォンという物がありまして、それをすこし思いつきりひっぱたいて借りてきました。」

「お前・・・それ奪ったんじゃないだろうな。」

「あっ見えました。」

電柱の指示で、クロ達はソリを止めて、氷山の下を見た。

「見えます?」

「なんだ小させえじゃねーか?」

氷山の下で見えるのは、すこしだけ丸いものがうつすらと見えた。

「よし! どいてろ」

クロはガトリングを取り出し、氷山の下を破壊した。

「ヒロスエ!!」

剛の命令でヒロスエが引きずったのは小さめの円盤だった。

「ワオ」

円盤を出したことに電柱は喜んだ。

「ありがとうございます。早速修理します」

「おう」

「へーこれが宇宙船か〜ほんとにあつたんだな」

「どれ」

剛は円盤の下にあるスイッチを押した。

「あ！気をつけて下さいっ！」

「はっ」

電柱の言葉に剛はキョトンとしたが

「ガアアアアア」

「ギョエー！！？」

宇宙船のドアから出て来たのは、一つ目のエイリアンだった。

「なんだコイツは〜！！！」

剛はエイリアンに追われて、もう必死だった。

「我々のペットです。逃げないと噛みますよ」

「まじかよ」

「アッハッハ追いつかれるぞ〜」

クロは円盤の上で笑っている時、エイリアンはクロに目を付けた。

「なんでこうなるんだよっ!」

今度はクロが走る番だった。

「今度はクロか・・・」

「ガハハ 追いつかれるぞ〜」

「あ〜皆さん手伝ってもらえます」

「おう、終わったらミーくん返せよ」

剛は宇宙船を直しているとき、クロはエイリアンに追われていた。

「くそーっしつこいな!」

クロは首輪の鈴を鳴らして叫んだ。

「行くぜ! ジェフティ」

クロはジェフティを展開して、一応回避して、エイリアンに向けてブレイブランチャーを発射した。が、

「何!?!」

エイリアンは反射的に飛んで、かわしまくった。

「こっ この野郎・・・」

クロはすこしだけイラツとし、エイリアンは笑いながらかわした。

「ガアアアアア」

「わー！？」

エイリアンはクロに襲いかかり、一瞬にして食べた。

ゴクン

ブリッ

味がしなかったのか、糞にして出した。

その一方

「フーどうやら、なおったみたいですね助かりました」

電柱はホッと溜め息をついて喜んだ。

（確かに直ったのはいいが、あの装置はひょっとして……）

剛は直した時に、ある装置を気になっていた。

「あっお帰りなさい」

「んっ」

「？」

「おう、それで、宇宙船は直ったのか？」

（え、なんでペットが主人に向けてタメ口を……てかあいつ喋れたんだ）

「……………」

一夏と剛はエイリアンの態度を見て驚いた。

「はいっこの方に手伝ってもらったので」

「どけー！」

エイリアンは電柱を突き飛ばして、宇宙船の中に入った。

「なるほど、全て完璧だ」

「この状況どういことなんだ」

「いや、ワシに言われても」

『おいっ』

一夏と剛は怒りの矛先を電柱に向けた。

「すみません。実は私召使いロボットなんです。言うこと聞かないと鉄クズにされます。」

電柱は本当は主人ではなく召使いだと知った時、宇宙船は宙に浮かび中から、レーザーが発射された。

「くそつやっぱりレーザーか！」

そして、剛と一夏が見たものは恐ろしいものだった。

「こ……これはっ！」

「氷の下から超巨大な円盤が」

一夏は驚きながら叫び、宇宙船は超巨大な円盤に装着した。

「グハハハハ ご苦労だったな マヌケな地球人どもよ！」

エイリアンは何々大笑しながら言った。

「これでようやく地球侵略作戦を実行できる。目覚めようとしたみなぎる力を今こそ解放するのだ」

超巨大円盤の中に眠っていたエイリアン達は一匹ずつ目覚めていった。

「そついうことが」

「そついうことらしいな」

クロは氷山を登りながら、侵略作戦の話聞いていた。

「どーする」

「コイツを授けようクロ」

剛が出したのは、赤いスニーカーだった。

「お前用にあつらえたスーパースニーカー その名もNIKUQ
マックスだ!!!」

クロは早速、スニーカーを履いた。

「水上もOK ジャンプなら100メートルまで飛べるぞ。あとIS
Sをつけたら5倍ほどのパワーが引き出せる」

「おし、一夏! 白式の用意をしとけ おいミーくんを出しな」

クロの欲求で、電柱はミーくんを出した。

「うっっ狭かったよ」

「早速が出番だミーくん」

クロ&ミーくんはIS+スニーカーをつけて巨大円盤の方に向かった。

一夏も白式を展開して巨大円盤に向かった。

「一夏! お前は下の方を頼む」

「おう!!!」

「ミーくん オイラ達は上からだ行くぞ」

「帰って眠りたいよ〜」

ミーくんは愚痴を言っていて、一夏は白式を零落白夜を発動した。

「ジャーンプー!」

クロは思いっきりジャンプしゼロソードで円盤の上に突き刺した。

「オラオラオラオラ」

「うおおおおお!」

クロ&ミーくんと一夏の連携技で巨大円盤を切り裂いた。

クロ&ミーと一夏は円盤の上に集まって、

一人と二匹は円盤を思いっきり踏んだ。

その時、

ドカアアアアーン

円盤は大爆発し、クロ&ミーと一夏は脱出に成功し、氷山の上に着地した。

「ミーくん、大丈夫かい」

「剛くん、早く眠りたい」

「てか、はやく箒を出せよ」

「はい」

電柱はカプセルを取り出し、光の中から、箒が出てきた。

「う……うん一夏」

「箒!!」

一夏は箒に抱きついた。

「い……一夏、この状態は恥ずかしいから離れてくれー!!」

箒は赤らめながら、言った。

「お……おっ」

「おい……一夏なんかへりが出て来たぞ」

「へり!!オーイ」

こうして千冬達教師陣が現れ、思いつきり説教され、(クロモ)一ヶ月間放課後補習をやるハメになった。(クロはなし)

授業が終わり、一夏は寝ようとしたが、

「ねえー ねえー 一夏くん」

一夏は上を見上げて見たものは

「僕、クロちゃんだよ。一夏くん 遊ぼーよ」

「なんでおまえ、この教室に入るんだよ。てか、お前の星に早く帰れー！！！！！！！」

一夏は大声で叫んだ。

さらにこの次に召使いロボットの逆襲があるのは・・・待て！！次回
！？

ミーくん・箒誘拐事件後編（後書き）

オリジナルサイボーグアニマルを考えてみた結果、やっぱり味方側もつけようと考えています。

鬼ごっこバトルプロローグ（前書き）

仮面ライダークライマックスヒーローズフォーゼをやって一番扱いやすかったキャラクターやっぱりオーズです。

鬼ごっこバトルプロローグ

「カア カア カア」

ある夕日の日 カラス達が巣に帰って行くとき、一人だけポツンと広い空き地の土管に座っている元召し使いロボがいた。

「ハア」

あーども 前回到引き続き出ちゃいました。 召し使いロボです。

いやー秋もすんなり、漂い、えっ季節がもう過ぎてる。 いいーじやんよー！！！？そんくらい別によー！！！！・・・

まっ 私は故郷の星を離れて、この地球で暮らしています。

故郷の星では、ずっと主人達にこき使われて、辛い人生を送ってきました。

「テンメー こんな生ぬるいメシが食えるわけねーだろ！！？ このボケ！！！！！」

「このポンコツ役立たずロボ！！！」

「ダメロボ！！！！！」

やがて、主人達の召し使い生活が終わり、これでやっと私の地球生活が始まると思ってました。

「ハア」

「ただ、現実には甘くなく十万年離れた地球でもやっぱり人生は辛いです。」

「何故ならやっとなさできた友達が相手にしてくれないのです。」

「僕 ミーくんだよ。クロちゃん 遊ぼうよ」

「帰れ うつとーしい」

「ミーくんと遊ぶためにハカセの姿になりましたが」

「ミーくん」

「殺すぞ」

「ハカセと遊ぶために篝さんの姿に変えましたが、」

「剛くん」

「忙しいから、よそに行ってくれ」

「夏さんと遊ぶためにクロちゃんの姿に変えても、」

「夏くん」

「ZZZZZZZZ」

寝てしまい、

最後に一夏さんの服に変えて箒さんに頼んでみましたが。

「箒ちゃん」

「貴様……斬り殺されたいのか（怒）？」

目は鬼の形相で睨まれました。

今年の流行のマ モリの鈴 くんのコスプレをしましたが入
れてみましたが、やっぱり無視されます。

友達……ってなんでしょう？

私は一度も友達が作れず遊び相手はいません。

これが召し使いロボの運命というものでしょうか？……

「なんで……… みんな………一緒に遊んでくれないのか
なあ」

私の顔に一つの涙が私の顔から流れていきました。

「………一人……ぼっちは……さみし……なあ………父
さん、母さん、僕の人生、一体何ですかねー！！！！！！！！！！うが

鬼ごっこバトルプロローグ（後書き）

とある家の住人が何故か二階から土管が飛んできて、部屋がボロボロになったらしい

被害者の人達のインタビューでは、

Bさん「いや〜 あれは何故か土管が飛んできて、なんなのかさっぱりわかりませんでした」

Sさん「土管が飛んできたせいで、もう うちのストープとエアコンがもう使えないなんて・・・（悲・泣）

以上ニュースでした。

史上最大の鬼ごっこ前編（前書き）

久しぶりのクロちゃんです。

史上最大の鬼ごっこ前編

このIS学園の廊下で一人に教室に戻ろうとしている少女がいた。

リボンで纏め、綺麗な髪をポニーテールで仕立て上げている少女、篠之ノ 箒である。

「全く、あの妙な奴に出会ってさんざんな目にあった」

妙な奴とはあの召し使いロボのことである。

「あいつのせいで・・・私の縦一閃を喰らわそうとしたが、変な銃で、小さくされるわ拳げ句の果てには寒い氷の下で元に戻ったのはいいが、千冬さん達教師陣達に説教されるわもう散々な1日だった。」

箒は前のこと（ミーくん・箒誘拐事件）を思い出し、あの時の屈辱をぶつぶついいながら歩いた。

「・・・でも、一夏達が私のために来てくれて・・・嬉しかったなあ」

箒は一夏とクロ（剛はミーくんのために来た）を思い出し、少し心

が安らいだ感じだった。

「しかし……………」

篤は廊下の周りのキョロキョロ見回しながら、何かを伺った。

(今の時間では、まだ女子生徒達はいるはずなのに、それにまだ休み時間は残ってあるというのに……………)

篤が歩いている廊下では女子生徒達は一人も無く、いる気配すらないのだ。それに千冬は今日は別の所で会議とあると聞いて、いないのだ。

「篠之ノさん、そろそろ時間ですので、遅れないようにね」

よかった。山田先生はいた。山田先生は私達の教室に入った。それにしても、山田先生、あんなに細くなつて……………んっ細く……………
……………
……………
……………

「な……………なんじゃああ!!!!!!? 今のは……………!!!!!!」

箒は我に返った。今通ったのは副担任の山田 真耶先生じゃなく、山田 真耶先生に変装したあの召し使いロボであった。

「あれ、どうしたんですか？ 篠之ノさん」

「うわああああ！！！！！！」

箒は驚愕したが、箒は召し使いロボの鼻をむんずと掴んだ。

「貴様~~~~！！！ これは一体、どういっつもりだ！！！」

「ちよつと痛い 痛いはらしてきらい！！！！（離してください！！）

箒は召し使いロボの鼻をぐいぐいと掴んだが、召し使いロボはそれを痛がつていたため、箒は疲れたので、一度離れた。

「もおーやだねー箒ちゃんったら寝ぼけちゃって」

カチン

箒はまた鼻をむんずと掴んだ。

「だから、その嫌がらせはやめろー！！！！！！！！！！」

箒はまた鼻をぐいぐいと引っ張りながら、叫んだ。

「痛い！！ 痛い！！ 私は担任の山田先生だよ」

「その電信柱みたいなのがどこが山田先生だーーーー！！！！」

箒の激しい質問に召し使いロボは負けてはいなかった。

「この体は、もっとよく、授業を受けるために細くしたんですよ」

「じゃあーその、スー　ー　オにそっくりなのっば鼻は何なんだ
！！！！！！！！」

「これは君たちの匂い嗅ぐために鍛えられたのっば鼻なんだよ」

箒と召し使いロボの激しい言い争いの時、教室のドアを触った時、
箒は何か気配を感じた。

「」の気配・・・・・・・・まさか!？」

箒は教室のドアを開くと、予想もしない出来事に生徒達は捕らわれた。

「な・な・ななんだこれはあー！ー！ー！！！！！！」

箒が見たものは巨大なカプセルの中に山田先生と一夏とセシリアと鈴及び、IS学園全生徒達が眠っていた。

「しかも、なんでコイツとご老人方も」

箒は何故か、一夏達以外、あのドクター剛とクロの飼い主のじーさん、ばーさんまでいるのだ。

バンバン！！

「！？？」

掃除用のロッカーが何故か激しい音がして箒はドアを開けたら、ロープで縛られ、口封じで暴れていたクロとミーくんがいた。

「お前達もか……」

箒は急いで、クロとミーくんのロープと口封じを解いた。

『ぶはーっ』

クロとミーくんはやっと息を吹き返し、召し使いロボを睨んだ。

「おい、テンメー!!そこ動くんじゃねー!!!!!!」

「テンメー、今、ズタズタに切り裂いてやるからなー!!!!!!」

クロとミーくんは召し使いロボに牙を向けながら、もう殺したいと思っ100%なのだ。

召し使いロボは頭にスイッチのようなものをつけ、扇子を出してパタパタと扇いだ。

「よしたまえよ こっちは人質がいるんですからねえ」

召し使いロボは箒達にムカつく態度で答えた。

「よし、どいてろ こんなもん一発で粉々に……」

「あーっっっっっちよつとそれはマズいですよーっっっっ」

クロがカプセルに向けてガトリングを出したが、召し使いロボは慌てて止めに入った。

「何故？」

代表に筈が質問した。

「振動で爆発する仕組みで作られているんです。」

「爆発とはどの程度の？」

筈はまた質問をして召し使いロボは……

「え〜とこの地球の歴史で例えるなら、第二次世界大戦で使用した原爆程度の……」

それを聞いた筈達は武器を取り出して、解除を宣告された。

「解除しろっ！！」

「今すぐ解除しろっ！！」

「本気だぞ今度ばかりは！」

「あ 箒さん ミーくん刺さってます 刺さってます。」

箒は懐から刀を取り出し、鞘を抜き、召し使いロボの頭に刺した。

クロはガトリングで威嚇をした。

ミーくんは二丁の包丁で召し使いロボを突き刺した。

「じ・・・実は解除する方法は一つあります。」

『早く言え!』

「まずは三人でジャンケンを行って下さい。」

箒達は早速、クロとミーくんとでジャンケンを始めた。

『最初はグー ジャンケン!』

『ポン』

出したのは箒はパー、クロもパーでありミーくんだけチヨキであった。

「はい、クロちゃんと箒ちゃんがオニです。」

「えっお前、チヨキ出せるのか！？ 猫なのに」

「あっ本当だ」

箒はそこはスルーして召し使いロボを睨んだ。

「何だオニとは！？」

召し使いロボは頭のスイッチを指差しながら説明した。

「つまり、鬼ごっこです。二時間以内に私を捕まえて、頭のスイッチを押せば、爆弾解除ゲームセットです。」

「そんな下らないことで、こんな馬鹿げた計画をしたのか！？」

箒は召し使いロボに向けて怒鳴った。

「だって、地球で最初に出来た友達の箒ちゃん達が僕と一緒に遊んでくれないんだも～～～ん」

またムカついた動き方で箒達はカチンとした。

バチン！！

「バーカ 油断しやがったな」

「はい、ゲームオーバーキャハハハ」

ミーくんは笑いながら、勝利を確定したと思ったが、

「残念でした。ズルはいけません。このスイッチはちゃんとオニが押さないと作動しませんよ」

召し使いロボはニヤリと表情を浮かべた。

「それでは、鬼ごっこスタート！！」

召し使いロボは猛ダッシュでドアを壊して、IS学園の外に出て行った。

「貴様！！ 学校のドア！！」

「わーーーークワ 箒ちゃん！！ 後一時間五十二分だ」

カプセルの上の時計を見て、驚愕した。

「急げー アイツ足だけはメチャクチャ速いんだよ」

「待て！！ 私は後から行くから、お前達は先に行け！！」

「こうなりゃオニもくそもねえ 一匹で捕まえよう！」

「よっしゃ！ じゃあ二手に別れよう」

クロとミーくんはIS学園の外から出てそこから二手に別れた角を
二手に別れた。

「見つけ次第半殺しにしろ！」

「ガッテン！！」

かくして、篝、クロ、ミーくん召し使いロボの逆襲が始まった待て
！！ 後編

史上最大の鬼ごっこ前編（後書き）

箒とクロちゃんとミークン特に箒はロミオの屈辱にリベンジって感じ
です。次回から、あのオタク先生再登場です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5508t/>

インフィニットサイボーグクロちゃん

2012年1月6日00時46分発行